

# KNCE NEWS

日本経団連  
自然保護協議会  
だより

No.37  
March 2006



## CONTENTS

### Special Features

〈特集1/フォーラム〉

マータイさんと  
語る  
MOTTAINAIと  
自然保護……………3

〈特集2/視察報告〉

マレーシア、  
インドネシア  
自然保護プロジェクト  
視察ミッション……………15

### Opening Article

夢と英知を信じて

本田技研工業株式会社  
環境担当役員 専務取締役 萩野 道義……………1

### Features

〈レポート〉

第9回ラムサール条約  
締約国会議参加報告……………9

〈NGO活動成果報告会〉

第23回報告会の概要……………12

### Series

企業が進める自然環境教育の  
現場を訪ねて〈4〉

富士ゼロックス「成田里山づくりの会」……………21

●ご寄付をいただいた皆様(法人・個人)……………13

## 巻頭言

# 夢と英知を信じて



本田技研工業株式会社  
環境担当役員 専務取締役

萩野 道義

弊社で恒例となった「砂漠植林ボランティア」の募集が始まる。募集に先立ち社員食堂の一角で写真展示が行われている。現地の子どもたちと従業員が共同作業で苗木を植える写真に心が和む。厳しい環境下でのボランティア活動にもかかわらず、毎回大勢の応募があり環境への関心の高まりを実感する。

この活動は、砂漠化した300haの土地を30年計画で人と自然が共存可能な緑の大地に蘇らせる計画である。この活動も7年目に入り現地、中国・内モン自治区の人たちもわれわれの活動に刺激され、自主的な植林の動きも出てきている。ボランティア活動による植林は小さな一歩にすぎないが、実は不可能と考えられてきた砂漠化した土地の緑化への取り組みが、広く現地に波及することを目指している。

またボランティアに参加した従業員とその家族が環境問題を深く考えるキッカケにもなってほしい。従業員の環境意識の高まりが、環境に配慮した企業活動や地域活動への原動力になると思う。

砂漠を緑の大地へ。植林作業を行う中国・内蒙古の小学生と従業員ボランティア。



弊社の創業者である本田宗一郎は企業理念の中心に「夢」を掲げた。弊社が四輪車ビジネスに参入した1960年代半ばから日本やアメリカの大気汚染問題が深刻になり、自動車の排出ガス規制が強化される時代になった。1970年には通称「マスキー法」が米議会で可決され、アメリカで四輪車の販売開始直後の弊社にとっては晴天の霹靂、大きな課題に直面した。ビッグ3をはじめ多くのメーカーが、この規制値の達成は不可能、と主張するなか、本田は「未来の子どもたちにきれいな青空を残したい」という夢に賭けた。研究所の開発力を排出ガス対策に集中的に投下し、開発はレース活動のようなスピードで進み、1972年には世界に先駆けてCVCCエンジンでマスキー法をクリアすることができた。

「未来の子どもたちにきれいな青空を残したい」という夢は、そのも若い世代に受け継がれた。クリーンエネルギーの研究をしていた一人の若い技術者の太陽電池自動車に賭ける夢。その実現に、全社から公募されたメンバーによりプロジェクトチームが結成された。そして1990年、オーストラリア南北3000キロを太陽エネルギーだけを動力源に走るソーラーカーレースに初挑戦した。そして3年後、空気抵抗を減らし、軽量化を進め、幾多の改良を重ねたドリーム号は、1993年念願の初優勝を果たした。太陽エネルギーだけを頼りに、オーストラリアの大地を平均時速85キロメートルで走り抜ける快挙を実現した。この時のソーラーカーの技術は現在の燃料電池自動車や太陽電池パネルに引き継がれた。

人類は20世紀という石油エネルギーの時代を経て、豊かな生活と引き換えに地球に負荷をかけ続けてきた。現在、地球上には7億台を超える自動車があるといわれるが、これが2020年までに2倍に増えるという見通しがある。そうすると化石エネルギーは枯渇し、

大気汚染と地球温暖化はもっと深刻化するかもしれない。私は一人の技術者として強い危機感を持っている。だからこそ、今のうちにモビリティ企業として、やるべきことは全てやっておきたいと考えている。当時不可能といわれたマスキー法以来、弊社はさらにガソリンエンジンの排出ガスに含まれる有害物質を低減する技術開発に取り組み、30年かけて約千分の一まで低減することができた。さらに限りなくゼロにするまで技術開発を続ける。ガソリンエンジンのクリーン化だけでなく、ハイブリッド自動車、天然ガス自動車、そして燃料電池自動車の技術開発も加速する。CO<sub>2</sub>と地球温暖化の関連性については今後も研究と議論が必要だが、CO<sub>2</sub>が地球のバランスを崩しているのは事実だろう。化石エネルギーだけに頼らず、CO<sub>2</sub>の総量を減らすために太陽電池の技術開発を続けている。これからも次世代エネルギー技術のあらゆる選択肢を研究してゆく。

未来のクルマ社会の構想として、米国カリフォルニア州に弊社で開発した太陽電池パネルで発電し、その電気を使って水を電気分解して水素を作り、この水素を使って燃料電池自動車を走らせる実験を行っている。太陽エネルギーを利用するので水素の製造過程でもCO<sub>2</sub>を出さない。まだまだ実用化には課題も多いが、これが実用化すれば、完全な再生可能エネルギーによるクルマ社会が実現する。エネルギー源は太陽、排出されるのは水だけということになる。難しいといわれたことも何とか実現させてしまう、人間の夢と英知は限らない。

中国・内蒙古の砂漠でわれわれとともに植林活動に汗を流した子どもたちが大人になる頃にはこのような夢の社会が、身近なものになっているかもしれない。そして内蒙古の砂漠には緑の大地が蘇っていることを信じて。



排出するのは水だけ。燃料電池自動車と個人ユーザー Spallinoさんご一家。

フォーラム

# 「マータイさんと語る MOTTAINAIと自然保護」

ケニア共和国環境副大臣でノーベル平和賞を受賞した、ワンガリ・マータイさんを招き、日本経団連自然保護協議会と毎日新聞社の共催によるフォーラムが開催された。

マータイ環境副大臣は基調講演の中で、植林と民主化運動に取り組んできたグリーンベルトムーブメントと新たなMOTTAINAI運動が、地球の環境保全につながり、世界平和と文明の維持繁栄につながると感銘深く語った。

講演のあと、NGOから3名、企業から2名が活動事例報告を行い、マータイ環境副大臣からは、現地で活動するNGOと企業を講えるコメントやアドバイスが述べられた。大久保尚武協議会会長は、世界人類のために、われわれ経済界はさらに自然保護活動のネットワークを広げ、世界の環境に貢献しなければならないとまとめ、超満員の300名を越す会場の参加者とともに、今までにない熱気溢れる感動深いフォーラムとなった。



フォーラム

## 「マータイさんと語る MOTTAINAIと自然保護」

プログラム

日時：2006年2月21日(火) 15:00~16:45  
場所：経団連会館11階 国際会議場

●開会挨拶

大久保尚武 日本経団連自然保護協議会 会長  
河内 孝 毎日新聞社 常務取締役

●基調講演「MOTTAINAIと自然保護」

ワンガリ・マータイ ケニア共和国環境副大臣

●活動事例報告

- ・佐藤奈緒美  
ICA文化事業協会 コーディネーター
- ・小黒一三  
マサイマラ環境保全プロジェクトチーム 代表
- ・野澤真次  
サバー西アフリカの人達を支援する会 事務局長
- ・山中千花  
損保ジャパン環境財団 コーディネーター
- ・西堤 徹  
日本経団連自然保護協議会 企画部会 部会長、  
トヨタ自動車株式会社 環境部企画グループ 担当部長

【進行役】

真下正樹 日本経団連自然保護協議会 顧問  
(敬称略・報告順)



フォーラムは、去る2月21日、経団連会館の国際会議場で開催された。

## 基調講演

### 心を動かすMOTTAINAI

日本経団連奥田 碩会長ならびに自然保護協議会大久保尚武会長、そして皆様方、本日、私にこのような機会を与えていただきましたことに感謝申し上げますとともに、まことに光栄に存じます。

私は、日本に来るたびに新しいアイデア、新しいインスピレーションをいただいています。MOTTAINAIという言葉は、昨年来日して初めて知りました。毎日新聞の観堂義憲編集局長にお会いした際、日本では3R活動を行っており、MOTTAINAIという言葉を使っているのだということを知りました。京都のお寺の住職さんには「MOTTAINAIというのは、与えられるものを敬意をもって受け入れることだ」と教えていただきました。今日はまた、「おばあさんとモットイナイ」という本を書かれた、若いお嬢さんにも会いました。MOTTAINAIによってたくさんの人からインスピレーションを与えていただきました。

2004年にノーベル平和賞をいただきましたが、それは環境や自然を保護することをもっと尊重しようという考え方が、ノーベル委員会にとり入れられたからです。私たちは、壊れやすいこの小さな惑星である地球を守らなければならない。一部の人のためならざるに際限なく使える

資源のように見えますが、実は有限だということ。地球に住む人類、家族として、もっと敬意を持ち感謝の気持ちを持って、資源を使っていかなければならない。地球上の資源は未来の人たちにも使ってもらわなければならない。責任ある使い方をしなければならない。ノーベル委員会は、このような考え方を、世界に伝えようとしたわけです。

こうした行動を推し進めるためには、役に立つ言葉、つまり知的な能力に刺激を与え、心にも訴え、心を動かすような「言葉」をすることが重要だと思いました。知的な刺激だけの言葉では行動につながりません。心が動いた時、初めて行動につながっていくのです。そういった点で、MOTTAINAIという言葉はすばらしい言葉だと思います。私たちの心の琴線に触れることによって、環境を守るための行動を起こさせる言葉なのです。

### 環境は平和への架け橋

将来、私たちは資源を巡る戦いに遭遇しなければならないかもしれません。特に少なくなっている資源に水があります。アフリカでは農地、草地を巡る争いがあります。また、食料を巡る争いや、森のため、金のための争いなど、資源を巡る戦いがたくさん起きています。将来の紛争の原因を防ぐためには、資源を賢く使っていくことが一番です。それをノーベル委員会は認識

基調講演を行うワンガリ・マータイ  
ケニア共和国環境副大臣。



したのだと思います。

私たちが考えたのは、良き統治をする政府をつくることでした。すなわち国民を尊敬し、人権を尊重するような政府をつくること、少数者を尊重できる良き政府をつくること、最も大事なことだと思っていました。当時、私たちは圧政的な政府の下で生活していましたが、環境は破壊され悪化するばかりでした。その中で真っ先に被害を受けるのは、貧しい人たちなのです。貧しい人々は資源を持ってないから、そこでの争いが始まる。資源の不適切な管理と良き政府の不在が紛争を招くのです。私たちにさまざまな資源を恵み、所得をもたらしてくれる環境を守るためには、良い政府をつくる必要があります。そのため教育プログラムを進めることにしました。政府の統治の仕方について関心を持つ人たち、選挙に参加しようとする人々を育成しようと考えました。きちんとした選挙の中で人権を守り、良き統治を行い、そういう政府を選択して環境を守る。それによって、人々の紛争を予防できる政府がしてくれる教育を押し進めようと思ったのです。それが、長年にわたるグリーンベルト運動へと展開していきました。市民への教育は、なかでも女性の教育を重視しました。

将来の紛争予防のためには、より良い資源管理をし、より良い政府を全世界に打ち立てる必要があります。その活動の中で、日本人の方々と協力関係を持ちたいと考えておりました。

## 先進技術と伝統文化が 共存する日本

今や国境を飛び越えて企業活動が行われていますが、本当に遠いところで起こっている事柄が、私たちにまで影響を与えるような時代になってきたわけです。大陸の反対側で戦争が始まったら、私たちが巻き込まれないという保障はありません。ですから、戦争がどこからも起きないということが大切です。戦争が起きてしまえば、ビジネスなどもできなくなります。

私は、日本に初めて来た時、本当にうれしく思ったことがあります。この国では、すべての地域社会において知恵が働いているのです。そして文化——皆がモノを大切にするという文化——がありました。日本の方の強さの源は、非常に高度な技術を持ちながら、文化を、伝統を重んじ維持するという能力も持っているということです。それがMOTTAINAIという言葉に凝縮されています。先進国はもちろん、途上国の人にも、また文化が破壊されてしまった地域の人たちに対しても、日本人たちはこの言葉を通じ、各々の自分たちの地域文化に改めて信頼と自信をもたらしてくれる、勇気をもたらしてくれるのではないかと考えています。私はさまざまな国を訪れた時、あなた方にも自分たちが持っているMOTTAINAIという概念があるはずだ。それを見つけてくださいと言っています。そうすることで、自分たちの環境を守る。良き統治をもたらすことができる。紛争を予防し、平和をもたらすことができる。グローバルなMOTTAINAI運動に参加することができる。この概念をそれぞれの国に、自分たちの文化の中で活かしてほしい、見つけてほしいと思っています。

## 産業界こそ MOTTAINAIのリーダー

環境を守り、自然を保護する上で、一年というのは本当に短い期間です。しかし、この一年の間に、世界のさまざまなところでMOTTAINAIが使われるようになりました。今回は産業界トップの方々ともお話しすることができました。日本ですでに実行に移しておられますが、産業界の人たちこそ、MOTTAINAIのリーダーシップを発揮できると思います。

この概念は、いろいろな形になって日本の生活に現れています。先日、小池百合子環境大臣から風呂敷をいただきました。これはペットボトルをリサイクルして作られた風呂敷です。これこそ日本の産業界のマジックですね。こういった知識と技術力を持つ日本の産業界に、MOTTAINAI



日本経団連を訪れた、マータイ環境副大臣とアオリ駐日ケニア共和国大使を出迎える、奥田 碩経団連会長(写真右)、大久保尚武自然保護協議会会長。

NAIを世界に広めていただきたいと思います。

先日、北九州にお邪魔しました。地元の女性の方から、ここでは大気汚染の問題が20~25年前から生じていたと伺いました。この女性たちはナイロビでの女性会議にも来られたことがあり、地域の空気汚染問題に直面してから、環境問題に取り組んでこられたのだそうです。彼女たちは自分たちで、洗濯物にどういった成分がつくのかといった調査を行い、子どもたちのぜんそくの原因を突き止めました。それが政府や民間企業を動かすこととなり、今では、北九州は世界で最も美しい空気の街の一つになったということです。この話をぜひナイロビに本部のある国連環境計画(UNEP)に伝えたいと思っています。ごく普通の市民が、普通ではない素晴らしいことをされた。このように日本の方は、非常に強い決意とコミットメントを持っていらっしゃる。日本の民間セクターは、世界に貢献できると思います。それこそが、民間セクターによるMOTTAINAI運動になるでしょう。

昨年、来日して愛知万博を訪ねた時、トヨタのハイブリッドカーに乗せてもらいました。アフリカにこの車がやってくるのはまだ先のように



故郷のケニア、ニエリ郡で植樹するマータイさん=05年4月(写真提供:毎日新聞社)。

が、環境が良くなると同時にトヨタも発展するというのは、すばらしいことではないでしょうか。そして、イオングループもすばらしいプログラムを持っています。消費者とともにショッピングセンターで環境保全活動を行い、環境に対して“ありがたい”という気持ちを消費者とともに分かち合う工夫がなされています。

こういった日本の民間セクターとしての企業の環境貢献活動のノウハウを、他の国々にもコミットし、日本発として輸出していただきたい。それによって、企業の最前線におけるCSR活動を、他の国々においても発揮することができるでしょう。

多くの途上国では、まだ環境法自体が十分に整備されていません。皆さんの手で、国際的な行動規範を作っていただきたい。つまり、国際的なビジネスを進め、環境を守るための行動規範です。途上国の人たちは、あまりにも自国に投資を誘致したいがために、自国を開発したいがために、何でも受け入れてしまおうとします。しかし、開発の半面で環境が犠牲になることが往々にしてあります。それはわれわれの絶滅につながることであります。

## 過去の文明は教える

過去の歴史から、この地球上で消えてしまった文明は、環境を犠牲にして進歩を求めた文明だったといわれています。逆に、生存してきた文明は、開発を進める一方で、環境に対しても敬意の念を忘れなかった文明だといわれています。これはぜひ重要な原則として考えておいていただきたいし、これに目覚めてほしいのです。ノーベル委員会も、人類にとって重要な問題だから、環境をとり上げたのではないでしょう。

小さな地球村です。小さな惑星です。宇宙飛行士が、宇宙から小さな青い惑星である故郷を見た時、そこから見た地球には国境などなかったのです。見えたのは大地と青い水だけだったと言います。科学者にとって分かっていることは、この地球は生命が宿っている唯一の惑星だということ。ここに人間の種として考えるべき選択肢があります。この地球と呼ばれる小さなボールとともに、環境と共生することを学び、そこにある資源をお互いに公平に共有・活用し、皆で生存していこうとする選択肢があります。その一方で、そういったことを一切忘れてしまい、今現在に生きるという選択肢もあります。その場合には、これまで絶滅してきた生物と同じ運命をたどってしまうことになるのです。私たちは慎重でなければなりません。

## 自分のMOTTAINAIを発見してください

こういった点で、京都議定書の使命は重要です。各国政府がこれを批准してはいますが、一般の市民の方々に申し上げたいのは、政府が何をしてくれるのかは、あまり気にしないでほしいということ。こういった課題は、一人ひとりの課題です。民間セクターとして、個人として、マスコミとして、また私のように植林をする人間として、自分でできること、やれることを行ってください。われわれが日常生活でできる小さなMOTTAINAIに注目してください。例えば、皆さんが独自にできるMOTTAINAIがあるでしょう。リサイクルや資源の利用を減らす工夫、そして環境に敬意を払い感謝の気持ちを持つこと、これが人々の心に届くこととなります。

われわれのような人間は、これからも木を植え続けます。京都議定書を支援し、事業を支援し、地域を支援するでしょう。

何よりも大切なことは、次の世代にチャンスを与えることです。私たちは未来の世代にもチャンスが与えられることを保障しなければなりません。そのためには、それぞれのMOTTAINAIを発見し、発明しなければなりません。小池環境大臣のMOTTAINAIは風呂敷です。私にとってのMOTTAINAIは植林です。世界に向かってMOTTAINAI運動を展開するのです。すべての人たちが自分たちのMOTTAINAIを見つけ出して実践し、生きてゆくことを可能にしなければなりません。それを通じてより良い環境を築き、未来に平和を築いていただきたいと思います。

## プロフィール

Wangari Maathai (ワンガリ・マータイ)

1940年生まれ。ケニア共和国環境副大臣。生物学者を志し、米国に留学。米ピッツバーグ大学で修士号を取得。71年ナイロビ大学で東アフリカ出身の女性として初の博士号を取得した。77年に有志と「グリーンベルトムーブメント」を創設し、植林運動を開始。植林を通じて貧困層の人々の社会参加の意識を高め、女性の地位向上とケニア社会の民主化を進めた。ケニア全土に1500カ所の苗畑をつくって、植林した苗木は3000万本に達し、植林はケニア民主化のシンボルになった。2004年、環境分野でノー



ベル平和賞を受けた。05年来日時に、わが国の「もったいない」に出会い、「MOTTAINAI」を地球環境を守る世界共通語として各国で訴えている。

グリーンベルト本部の育苗所で苗木を持つマータイさん＝05年12月(写真提供：毎日新聞社)。

## 活動事例報告

### 苦くてまずいウメがMOTTAINAI

ICA文化事業協会  
コーディネーター 佐藤奈緒美

ICAジャパンは、1970年代から「住民による住民のための、長期的な地域開発」を理念として国内外において活動し、約30年間で、国際協力、セミナーや研修、多文化交流イベントなど185以上の事業を実施してきた。60年代に独自に開発したICAの地域開発マニュアルは、実際の活動に基づいて改善され、4年に一度ICA総会で更新される。そのため、人種、性別、役職、年代、貧富の差を問わず利用でき、また大規模なグループから家族、個人レベルまで利用することができる。

KNCFの支援を受けたベトナム北部山岳地での自然保護活動地には、タイ族、ハモン族という少数民族が住んでいる。住民同士が話し合い、15年かけて、森や花、池のある自然公園や子どもたちの運動場を作りたいというビジョンが出てきた。どのように達成するかを話し合い、具体的な活動計画を立案。青年団が苗木を作り、自治体が苗木を買い取り、女性組合と青年団で植樹する。青年団はもらったお金で運動場を作るといふ計画である。最終目標は地域に住むトレーナーを育成することで、自然を保護する村おこしを始める。

この事業の中で発見したモックイナイを紹介したい。現地にある梅林でとれるウメは苦くてまずいため、役立たずの木とされ、切り倒す計画だった。日本から梅干、梅酒などを持って行ったところ、大変おいしいと好評で、住民たちは切り倒すことを思い止まった。ケニアでは、ニームが家畜の体調を整えたり、天然の虫除けとなることを教えた。

今年から行うケニア・カジアド県での事業では、水があふれる森林、グリーンベルト地帯というビジョンを3年前に確認した。貯水池の建設、家畜の糞を使った液肥、堆肥づくりの訓練を実施する予定。住民が主体となって、官庁を含めたネットワークを利用して情報交換を行い、協力体制を構築していきたい。

## 日本の皆さん、ぜひマサイマラへ

マサイマラ環境保全プロジェクトチーム  
代表 小黒一三

25年前、初めてアフリカを訪れた際、いっぺんに好きになってしまった。ケニアのすばらしさを日本の皆さんに伝えたいとマサイマラ地区に土地



NGOや企業の活動報告を聞く、マータイ環境副大臣、大久保尚武自然保護協議会会長、進行役の真下正樹協議会顧問。



報告者の皆さん。写真左より佐藤奈緒美、小黒一三、野澤眞次、山中千花、西堤 徹の各氏。

を借り、ロッジを運営してきた。

マサイマラ国立保護区は、野生動物の宝庫と世界的に知られており、訪れる観光客は年間90万人、年々増加傾向にある。日本人の割合は1.5%だが、そのうち約1万人がマサイマラに足を運ぶ。ここはそれほど広い場所ではないが、セレンゲティ国立公園からたくさんの動物たちが草を食むために移動して来る。特にヌーがマラ川を移動する際のスペクタクルが観光客を魅了する。またここは、多様な動物だけでなく、世界で2番目に多品種の鳥が生息する別天地でもある。

問題はここ周辺の土壌。ブラックコットンソイルという粘土層で、固まるとセメント以上に堅くなる。このために植物が深く根を張ることができず、少しのインパクトで沙漠化に向かってしまう。年間降雨量が1200mmしかないが、集中的に雨が降るので、ぬかるみを避けるために、また新たなぬるみが出てしまうという悪循環。

マサイマラ地区を管理しているのがマラ州政府。公園の入場料を30ドルも取っているにもかかわらず、利用基盤となる道路が適切に整備されていないため、無秩序に走行するサファリカーにより環境が悪化し、野生動物の生息にも悪影響を与えている。サファリカーのドライバー教育研修も含め、土地を回復して、日本の皆さんにもたくさん来ていただきたい。

## 森造りと土作りで貧困解消

サバ=西アフリカの人達を支援する会  
事務局長 野澤眞次

「森造りと土作り」で貧困が解消できることは、310年前の日本で立証されている。川越藩主の柳沢吉保が、不毛の地とされた埼玉県・所沢にある三富新田に240所帯の農民を入植させ、「森造りと土作り」で見事に生活自立を実現した。

サバはこの史実を西アフリカでの活動モデルとしている。森には、防風効果や、農地活性化の材料としての落ち葉がある。これを家畜の糞と一緒にすることで、堆肥やボカシができる。昨年、三富新田にマラウィの駐日大使に来ていただき、落ち葉かきを体験していただいた。

ギニアでは、まず苗木の育成から始めた。第二次世界大戦後、欧米の諸国が来て木を伐っていったため、ほとんど裸になってしまった。森がなくなってから60年以上が経って、森のありがたさを覚えている長老がいなくなり、村の住民には森造りの概念が熟成されていない。

植樹から7年目でかなりの森になってきた。枯れていた泉が50年ぶりに湧出し、鳥がやって来た。鳥は住民たちにとって貴重な動物たんぱく源であり、その他、小さな動物たちも集まって来るようになった。カシューナッツの木も育ち、果実は食用に、種子は市場で換金できる。燃料用の薪が不足していたが、選伐の際に出た木や枝を活用することが可能になった。

アブラ椰子の実を絞り、その絞りかすを発酵させて、ボカシ肥料を作っている。今まで廃棄していたものが立派に肥料になる。モットイナイにつながる。そういう現象を目にして、住民たちは森のありがたさが、やっと理解できるようになってきた。

今、有機農法をさらに広めるために、FAOが展開しているマイクロプロジェクトに参加し、子どもたちと有機農法を学んでいる。

## 木を植える“人”を育てたい

損保ジャパン環境財団  
コーディネーター 山中千花

社内のボランティア組織「ちきゅうクラブ」で、アフリカ難民キャンプへ古着を送る活動を行っている。これがきっかけとなって難民問題に関心を持

ち、1997年、UNHCRが難民キャンプへの派遣募集を行っていることを知り、ボランティア休暇を取って現地へ行った。

カクマという難民キャンプの印象は「モノがない」。暑くて乾燥しているが、いったん雨が降ると干上がっている川底が土壌浸食するほど増水する。難民キャンプでは、小学校で、子どもたちと平和を考える授業を担当。その時、「平和の意味が分からない」と子どもたちに言われた。私も十分な説明ができず、完全な平和ボケであると実感した。そこで、平和のイメージを共有するために絵で表したらどうかと提案した。「アフリカ・アワー・ホームランド」と名づけた絵が2カ月後に完成。それで彼らがイメージした平和とはこういうものなんだと分かった。

帰国前、難民の一人に「帰れるところがあっていいな」と言われた。人生の選択肢や希望、夢が持てないというのは本当につらいと実感した。帰国後、仕事が手につかず、気持ちだけが焦った時期もあったが、経団連1%クラブで体験談を話したり、毎日新聞で連載をする機会を得て、多くの人に共感を持ってもらい、一緒に行動してもらうことで可能性が開けると感じた。

現在の職場では、市民として、また企業人として、環境問題や持続可能な社会づくりに向けて取り組む重要性を強く感じるようになった。環境問題の行方は“人”によって左右されるので、当財団では「木を植えるより人を植える“人”を育てる」をモットーにしている。具体的には、大学生などの若い世代を対象とした環境NPOでのインターンシップ制度(CSOラーニング制度)を実施。共感が生まれれば自分の頭で考え、活動できるのではないかと考えている。社員から毎月100円以上集め、この制度の原資としている。これまで259名が卒業し、今後、社会の中核を担う人になっていくと期待している。

その他、93年からスタートした市民環境公開



日本をはじめ、ネパール、ペルー、ケニアなど世界各国で事業を展開するICA文化事業協会。



マサイマラ環境保全プロジェクトチームの活動地には、たくさんの動物たちが草を食むために移動してくる。



埼玉県所沢市の「三富新田」の史実をモデルに、西アフリカで活動するサバ=西アフリカの人達を支援する会。



ボランティア休暇を取り、アフリカの難民キャンプへ出かけた、損保ジャパン環境財団の山中千花さん。



「トヨタの森」で里山の環境保護に取り組んでいるトヨタ自動車株式会社。

講座は、現在、14年目を迎えている。また、省資源、省エネルギー活動を実施。いずれも「全員参加・自主性・地道継続」「認識から行動へ」が大切だと考える。環境問題、貧困問題は、速いスピードで悪化しているのではないだろうか。だからこそ、取り組みを加速していく必要がある。

### 企業とNGOへより一層の働きかけを

日本経団連自然保護協議会 企画部会 部会長、トヨタ自動車株式会社 環境部企画グループ 担当部長 西堤 徹

日本経団連自然保護基金、自然保護協議会の活動概況とトヨタ自動車の取り組みを紹介したい。自然保護協議会では2003年に発表した「自然保護宣言」のフォローアップを中心に活動を行っている。支援プロジェクトの視察・フォローアップ、国内外のNGOとのネットワーク形成などである。自然保護基金では、年間約1億5000万円の寄付金で、委員会審査で選ばれた約60〜70件のプロジェクトを支援。これまで累計613件、約18億円を支援してきた。地域別に見ると、アジア、太平洋の比率が高く、アフリカへの累計支援

額は約7000万円で全体の約4%である。

05年度の自然保護協議会の主要な活動は、①ボルネオ島自然保護プロジェクト視察ミッションの派遣、②支援プロジェクトのフォローアップ調査として屋久島や新潟・佐渡島での活動現場を視察・訪問、③NGOとのネットワーク形成として意見交換会、交流会を実施、などである。また毎月、プロジェクトの進捗状況を聞くため、NGO活動成果報告会を行っている。

来年度への課題としては、①企業への一層の啓発活動、②企業の持つノウハウのNGOでの活用などが挙げられる。

トヨタ自動車の自然保護への取り組み事例としては、「トヨタの森」で里山の環境保護を行っている。昨年4月にはトヨタ白川郷自然学校が開校、NGOと連携して体験型環境教育プログラムを実施している。また中国・河北省豊寧滿族自治區では6年間で2500haを目標に植林活動を行っている。その他、トヨタ環境活動助成プログラムでは、6年間で約11億、90件の支援を行っており、ケニアをはじめアフリカ諸国で7件を支援している。

### マータイ環境副大臣からのコメント

素晴らしい活動事例をご報告いただき、賞賛申し上げたいと存じます。

国連の環境計画などでは、いろいろな合意書ができます。これも大切ですが、その合意書を実行に移す人がいることがより重要で、意味があるのです。

このような事例報告を何と、自分もぜひ一度貢献してみたいと思いますよね。でも、こうした問題は一晩で解決されるものではなく、長期の取り組みが必要です。歩兵のように、地に足の着いた活動をする人が必要だということを忘れてはなりません。お金も、権力も、手に入れることはできるでしょう。しかし、時にはそういうことは忘れて、本当の幸せとは何かということを考えなければなりません。

報告された方々が、自身を忘れて難民キャンプに行く、動物の中で生活をする、十分な食料のない人たちと生活する、そしてその人たちの苦勞を目の当たりにする。そういう体験をした人たちのコミットメントこそが、人間として私たちに大切なことを気付かせてくれると思います。そんな歩兵の人たちにこそ感謝し、またそうした人たちに支援してくださる、また支持していただいている

人たちに感謝したいと思います。

最後に、日本経団連がこのようすばらしいフォーラムを開催し、すばらしい事例報告をお聞かせいただいたことに感謝したいと思います。

### フォーラムまとめ

大久保会長は「私たちは、事例報告のように現地で献身的に取り組んでおられるNGOの人たちと、互いに役割を分かち合いながら、いかに広くネットワークを整え協力していくことができるか。このことをより一層、想いを新たに推進していかなければならない」と総括した。

進行役の真下正樹顧問は「日常生活、あるいは経済界の活動の中で、自然の恵みや摂理というものを学び、それを尊重する経済社会が実現できるよう行動してゆくことを、会場の皆さんと確認したい」と結び、フォーラムを終えた。

最後に、日本経団連・永松恵一常務理事が、地球温暖化対策と産業廃棄物の削減に率先して取り組んでいる「環境自主行動計画」を紹介、MOTTAINAI運動につながるものとしてさらに行動を進めていくとの誓いを述べ、なお感動的な余韻を会場に残しながら閉会となった。



懇談会

# マータイ・ケニア共和国環境副大臣一行が 日本経団連を訪問

フォーラムの開催に先立って、ワンガリ・マータイケニア共和国環境副大臣、アオリ駐日ケニア共和国大使、ワンジェラ・マータイ嬢、ラス博士他一行が日本経団連を訪問し、奥田 碩経団連会長ならびに大久保尚武自然保護協議会会長と懇談した。

マータイ環境副大臣はノーベル平和賞受賞の後、昨年2月にも日本経団連を訪問されている。その折、MOTTAINAIという言葉に出会い、有限な地球上の資源を浪費せず、後世代にも残していけるよう3Rの活動を進めていくためには、人々の心に訴え、心を動かす言葉が必要で、MOTTAINAIはピッタリのすばらしい言葉であり、それ以来MOTTAINAIキャンペーンを展開しているとのことであった。

この1年間に、京都議定書の発効、愛知万博の開催などもあり、世界のさまざまなところでMOTTAINAIが使われるようになった。また、どこの文化にもこの概念はあるが、その重要性を忘れていたの呼び覚ましてくれたことが大きいとお話があった。奥田会長からもMOTTAINAIの精神を広めておられるマータイ環境副大臣に敬意を示すとともに、わが国経済界を挙げてCO<sub>2</sub>削減や3Rの推進に取り組んでいる実情などを説明し、資源の有効利用を巡って和やかに懇談した。引き続き、マータイ環境副大臣一行は自然保護協議会の会長、副会長ほか役員との会合に席を移し懇談した。

## マータイ環境副大臣一行を囲む、 自然保護協議会役員懇談会

開会に当たり、大久保協議会会長より、日本の経済界は経団連会員企業を中心とする法人や個人からの寄付からなる自然保護基金を通じ、世界各国のNGOが実施する自然保護や環境保全プロジェクトに対し、設立以来13年間で累計613件、18億円に上る支援を実施しており、アフリカ諸国についても27件、約7000万円の支援を行っていることなどを説明した。



## マータイ環境副大臣の説明要旨

三十数年になる植林というグリーンベルト運動を通じて、環境を保全し資源の持続的な管理を目指す取り組みが、水や農地や牧草地など、有限な地球上の資源を巡る紛争の防止に役立つこと。ひいては、世界平和をもたらすことを多くの人に分かってもらえるようになり、またノーベル委員会も深い理解を示してくれたことが平和賞受賞につながった。

運動に取り組んだ当初から、人々が毎日直面する問題と環境の悪化には直接的な関係があるのではと感じていた。当時ケニアでは飲料水、薪、食料の確保など、特に女性が日々の生活で多大の労苦を負い、貧困が蔓延していた。その一因に、土地固有の木を伐採し、商業用に単一の外来種の植林を行うことから山の貯水能力の低下、川の流量の激減、少雨が大きく影響していると考えた。

さらに、このような自然破壊は必ずしも意図的な破壊ばかりではなく、ときに無知から発生するものである。また、資源の不適切な管理と環境に配慮しない政府により事態の深刻化が引き起こされるため、正常な選挙の中で、人権を尊重し環境を守る政府を選択していくような自立した国民を目指して、とりわけ女性の教育を推し進めようと思い、それが長年にわたるグリーンベルト運動に発展していった。

今日、われわれの呼びかけが徐々に受け入れられ、アフリカ諸国内での協力、国連と

の連携も進みつつある。今後とも一層の支援をお願いしたい。

## アオリ駐日ケニア共和国大使の 説明要旨

京都議定書の発効一周年を経、主要先進国におけるCO<sub>2</sub>削減コミットメント実行に向けた動きが見られるが、途上国からの排出権取得に関し、アフリカにおけるCDM事業の可能性にも注目してほしい。現在、日本の経産省からケニアに専門家が派遣され、水力発電、地熱、風力、無鉛の石油精製、サトウキビによるバイオマス発電等に関する可能性調査が行われており、日本の経済界の理解と協力をお願いしたい。

## 当協議会からの発言

マータイ環境副大臣が長期にわたり、さまざまな障害、困難を乗り越え、グリーンベルト運動を展開されてきたことに敬意を表したい。またご説明から、植林活動がCO<sub>2</sub>削減問題のみならず、貧困問題、資源の持続的活用、紛争の予防に役立つことを実感できたことに改めて謝意を述べたい。

製紙会社側から、これまでのアマゾン川流域での植林に加え、21世紀の新しいプロジェクトとしてアフリカ大陸でのCDM植林にも注目しているが、CDM植林には種々の制約があり、これまで承認例がないなどの問題も多い。その重要性に関する世論形成に関係各位の理解と協力を願いたいとの発言があった。

# 第9回ラムサール条約締約国会議参加報告

昨年の11月8～15日、ウガンダ共和国の首都カンパラで、第9回ラムサール条約締約国会議(COP9)が開催されました。この会議に、ラムサールセンターの中村玲子事務局長がオブザーバーとして、また積水化学工業株式会社の柳井俊郎氏が日本経団連自然保護協議会企画部会の代表として参加しましたので、報告させていただきます。

## 回を重ねるごとに成長したCOP

ラムサールセンター 事務局長  
中村 玲子

### ■COPのあり方を変えた釧路会議

2005年11月8～15日、ウガンダのカンパラで開催された第9回ラムサール条約締約国会議(COP9)にオブザーバーとして参加した。ラムサールセンターのCOP参加は



日本人初の「ラムサール湿地保全賞」に輝いた中村玲子事務局長による受賞の挨拶。

これが6回目。初参加は1990年のCOP4(スイス・モントルー)で、同年5月に設立したばかりのラムサールセンターの、これが最初の公式活動だった。

私たちはラムサール条約の日本とアジアへの普及を目標とするNGOなので、COPに参加して最新動向を調査・確認するのはいわば基本の仕事である。COP4以降、COP5(釧路)、COP6(オーストラリア)、COP7(コスタリカ)、COP8(スペイン)、そしてCOP9と代表を送り込んできたが、COPもこの間、いろいろ様変わりした。

90年のCOP4当時は、条約の締約国が53、登録湿地が483とまだ少なく、会議参加者も非締約国合わせて79カ国400人程度だった。国際都市モントルーでは、ラムサール会議も多数開催される国際会議の一つでほとんど注目を集めず、参加政府代表の多くが技官系だったせいもあって、知る人ぞ知る湿地保全の科学者会議といった雰囲気だった。そんななか93年のCOP5釧路市誘致のため、大挙して乗り込んだ鰐淵俊之市長(当時)以下数十人の釧路地域自治体関係者一行が、かなり異質の目立ち方をして

いたのを覚えている。

93年の釧路会議の雰囲気はまったく違った。初のアジアでの開催を機に締約国を増やしたいという条約側の狙いに、アジアの先進国である日本が資金提供を含むさまざまな面で本気に応えようとし、さらにCOPを地域活性化につなげようとした地元

の熱い思いが加わった。独自のロゴマークやポスターがつくられ、街中に歓迎の垂れ幕や看板が掲げられ、ガイドや通訳などで会議運営をサポートする市民ボランティア1500人が議場の内外に配置された。NGOやメディアも積極的に開催成功を後押しし、結果、釧路会議は95カ国1200人参加の史上最大規模のCOPになった。

釧路会議は「もっとも心温まるCOPだった」としていまも語り草になっているばかりか、COP自体が普及啓発の有力なツールになりうることを条約事務局が認識した会議でもあった。この主催国挙げてのCOPのフェスティバル化は、続くCOP6以降も継承され、いまでは多数のボランティアの参加協力はもちろん、COPごとにご当地の個性を色

## 決議IX.19「ラムサール条約の効果的履行における地域的な湿地シンポジウムの重要性」(抜粋)

本締約国会議は

10 アジア地域におけるすべての締約国と非締約国に対し、AWSがアジアでの湿地の保全と賢明な利用のための情報交換の効果的な場であり、良好な実践に関する助言の源となっている点を全面的に認知するよう奨励する。

11 AWSが定期的に引き続き開催されることを支持する。

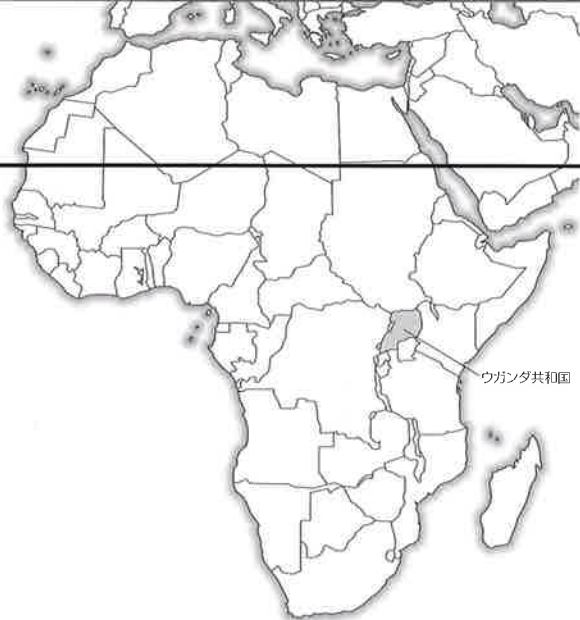
12 締約国に対し、ラムサール条約事務局と国際

NGOと協力して、AWSへの広範な利害当事者(地域政府、NGO、民間セクター、地域社会を含むがそれに限定されない)による支援と参加を助長するよう希望する。ただし、これは条約の中核予算に対していかなるかわりをもたないことに留意する。

13 ラムサール事務局と常設委員会に対し、地域内の会合を含むラムサール条約地域会合と地域での湿地関連フォーラムとの間のつながりを奨励し、進展させることを希望する。このことから、当該フォーラムでの経験の交換と革新的な実践についての議

論を通じ、締約国と政府が条約履行の支援になるようフォーラムの結果を十分に利用することが確保されることを目的とする。

14 締約国、国際NGO、その他の関連する科学・技術機関に対し、同様のフォーラムがまだ存在していない場合、AWSの経験を生かし、条約履行のための科学的、専門的な支援(特に条約にもとづいて設けられた地域的なイニシアチブ)をさらに強化する手段として、同様の地域的、科学・技術的な定期的フォーラムを創設するよう勧告する。



締結国147カ国の政府、国際機関、NGO、民間から約1000人の関係者が参加したCOP9。

濃く映したロゴマークやポスターが街を飾るのは定番になっている。

### 国際的調整と合意形成の場となったCOP7

2002年のCOP7は、別の意味で記憶に残っているCOPだ。前年からアジアでは、新規加入国イスラエルのアジア地域会合への参加を巡って、「地理的にアジアに位置する」と主張するイスラエルと、「敵」の参加は絶対に認めない」と主張するイランやシリアなど中東のイスラム国間で大論争が起きていて、その「政治的」決着をつけることがCOPの全体会議に委ねられたのだ。

関係国は技官の代わりに外交のプロを首席代表として送り、条約事務局側は議長団に、デンマーク政府代表の長老格の法律家を配置した。彼の老獪ともいえる名采配でアジア地域の分裂は避けられたが、条約の傘が途上国に広がるにつれて、湿地保全そのものを科学的に論じる場から各国の利害調整の政治の場へとCOPが変質していく姿を目の当たりにした。国際的調整と合意形成は、政府間会合の本来の使命であり、これはある意味で条約の成長でもある。

そしてこのCOPの成長が、ラムサールセンターなどNGO、企業、政府、研究者が協働で実現させた湿地保全を科学的に論じる場としての「アジア湿地シンポジウム(AWS)2005」(KNCF助成事業)の相対的重要性を増し、AWSの実績を評価し、定期的継続的な開催を促す日本政府提案の決議「ラムサール条約の効果的履行における地域的な湿地シンポジウムの重要性」(決議IX.19)の採択につながったと思っている。

## 「アジア湿地イニシアティブ」を世界に

積水化学工業株式会社 環境経営部 担当部長  
日本経団連自然保護協議会 企画部会委員  
柳井 俊郎



アジア湿地イニシアティブ関連のサイドイベントでプレゼンテーションを行う積水化学工業の柳井俊郎さん。

### ■ラムサール条約およびCOP9の概要

ラムサール条約は、1971年、国境を越えて移動する水鳥の保護を目的に採択された。環境の観点での多国間条約の先駆的な存在であり、現在、広く知られている「持続可能な開発」の概念を、その採択当初から「賢明な利用(Wise Use)」という原則で提案しているユニークな条約である。

イランでの第1回開催以降、3年毎に開催され、93年の第5回は釧路で開かれた。2006年1月末現在、締約国数150カ国、条約湿地数1579カ所、総面積133,918,140haとなっている。

今回、ウガンダのカンパラで開催された第9回ラムサール条約締結国会議(COP9)には、147カ国の締結国の政府、国際機関、NGO、民間の関係者ら約1000人が参加。初のアフリカ開催であり、テーマは「湿地と

水〜命を育み暮らしを支える」。飲み水の供給や水の浄化など人類に欠かせない湿地の役割に焦点を当て、湿地保全と上手にその恵みを享受する「賢明な利用」について議論した。

### ■会議参加の経緯と目的

日本からは、環境省自然環境局の名執芳博課長以下、野生生物課のメンバーと、日本の新規登録湿地となる自治体の代表30名余が参加。また、民間からは「ラムサールセンター」「日本湿地ネットワーク」など湿地保全にかかわるNGOや専門家が、企業セクターからは私が参加した。

今回の参加にあたっては、日本経団連自然保護協議会が定期的で開催している「NGOと企業の交流会」で、ラムサールセンターから、KNCFが助成しているアジアの湿地保全プロジェクトの成果をCOP9の場で評価してほしい、との発言があった。また、企業からは、日本企業の自然保護への取り組みを世界に向けて発信してほしいとの考えも出された。環境省もCOP9を「登録地を20カ所増やし、日本発信の新提案をする」重要な会議として位置づけており、ぜひKNCFや民間企業から参加し、その支援



KNCFの展示ブース。

## 第9回ラムサール条約締約国会議参加報告

活動を紹介してほしいとの要請であった。協議会事務局の代わりに、企画部会委員と日本の一企業の立場で、私が参加することとなった。

会議では、協議会の活動を紹介するとともに、協議会のメンバー企業として、CSR活動の一環で企業が行っている湿地保護の事例を、環境省が主催したラムサール条約湿地登録認証式とラムサールセンター主催の「Asian Wetland Symposium」の場でプレゼンテーションを行った。

### ■日本にとって 重要な会議となったCOP9

参加の意義は次のようなものであった。

●日本のラムサール登録地が従来の13カ所から33カ所に一気に増加することが承認されるという日本政府にとっては特別な会議になった。

●日本が提案した決議「ラムサール条約の効果的履行における地域的な湿地シンポジウムの重要性」(地域イニシアティブが果たす役割を評価し、アジア湿地シンポジウムを先駆的モデルケースとして他の地域のリージョナル活動へつなげる)が、今回の決議条文25本の一つとして採択された。

●上記、アジア湿地シンポジウムを中心になって進めてきた日本のNGO「ラムサールセンター」の中村玲子事務局が「ラムサール湿地保全賞」を日本人として初めて受賞し、日本側の取り組みの評価が高まった。また、ラムサールセンターが現地のNGOと計画した、アジアとアフリカの子どもの湿地交流イベント「子どもラムサール」がウガンダ政府と条約事務局から高く評価され、

COP9の公式プログラムに招待され、日本のリーダーシップを発揮する機会を得た。

●「企業・NGOのパートナーシップ育成のため、企業からNGOの活動への人的協力」「国際発信として自然保護関係の国際会議への企業参加」などを掲げているKNCFとしては、COP9に参加することはその目標を実践するよい機会であった。また、ダノンなど欧米企業の活動へのかかわりを知ることができ、有意義であった。

### ■アジア、アフリカで 日本のリーダーシップを

人間の生活と密接に絡み合う湿地の保全は、結局は地域に住んでいる住民の意識と決断にかかわってくる。登録湿地指定を契機に自治体が本格的な取り組みを始めれば、将来への展望が開ける。側面的な企業の支援もそこにかかわってくるものと考えられる。

国際的な協力関係についても、「アジア湿地イニシアティブ」の枠組みが宣言に盛り込まれるなど、日本政府のリーダーシップがアジアやアフリカに展開する湿地保護活動のイニシアティブを取る可能性を強く感じた。日本のNGOの活動も高い評価を受けていることがわかった。

次回のCOP10は韓国開催が決まっており、日本の湿地の「賢明な利用」をモデルに「アジア湿地イニシアティブ」を世界に広げるため、官民による日韓協力のパートナーシップが期待される。



会議場のあちこちで各国のNGOがミーティング。



ラムサールセンターがサイドイベントとして行った「アジア・アフリカ子ども湿地交流：子どもラムサール」に参加した子どもたち。



エクスカージョンで訪れたビクトリア湖畔の村で、村人の歓迎を受ける。

# 第23回報告会の概要



報告会での「呼緑協」福田道治会長。

## ■12～2月に2団体の報告会を実施

日本経団連自然保護協議会では、自然保護基金(KNCF)支援プロジェクトの進捗状況を直接知る機会として、NGO活動成果報告会を実施している。

昨年12月は「呼倫貝爾(ホロンバイル)地域緑化推進協力会(以下、呼緑協)」に中国での植林事業について、2月は「メダカのがっこう」が佐渡で進めているトキの放鳥に向けた環境整備の一環としての冬期湛水、不耕起(冬・水・田んぼ)による米づくりについてご報告いただいた。以下に12月に行われた「呼緑協」報告会の様子を記す。

## ■呼倫貝爾地域緑化推進協力会の報告会

「呼緑協」は、福田道治会長をはじめ、終戦時に中国にある事業地の小学校に在籍した人々たちによって設立された。懐かしい子ども時代を過ごした地へ、環境問題で何とか貢献したいとの想いが募り始まったという。99年より緑化事業に取り組み、翌年、正式に呼緑協として本格的な活動を開始した。

### 〈現地での活動状況〉

事業地は中国内蒙古自治区、その最北端にある呼倫貝爾市。小学校は中心地、現在の海拉爾(ハイラル)区にあった。現地は年間降水量300mm、1月の平均気温は-26℃。半永久凍土帯の厳しい気候条件下にあり、土壌が乾燥し有機成分が少ないので、草原退化、土壌流失等で生態環境が悪化。強風の時は飛砂が街に充満するなど深刻な状況になっているという。

現地政府は森林の減少に歯止めをかけようと、森林被覆率を8%から20%へ上げることを目標に植林に力を入

れ始め、現在は10%まで回復。呼緑協は現地政府と協定を結び、林業局をカウンターパートとし、適正樹種の調査・研究や植林方法などの技術支援を行っている。

### 〈独自の植栽方式〉

まず、針葉樹と広葉樹の混交林をつくることで、土壌の水分保持や肥沃化、病虫害の低減化を図る。また、現地に適した植栽種をマツ、アカシア、エンジュなどとし、ショウジマツの植栽に関しては、植栽方法を工夫。例えば、冬期には120cm程度の大きさに育った大苗を植える。理由は、厳しい寒さで凍った水分が、春になって気温の上昇とともに溶け、それが安定的な水分供給源となって、活着につながるからだ。苗木代が高く、手間もかかるため小規模な植林ではあるが、成長はいいらしい。一方、春期の植栽では10～15cm程度の小苗を植える。こちらはトラクターで遙か先まで植え付け溝をつくり、そこに小苗を植えていく、広大な面積に適した植栽方法である。春期といっても気温は-5℃程度という寒さ。現地の人たち50人1チームで活動しても、作業は朝5時から20時くらいまでかかるという、大変厳しいものである。昨年までの5年間で、冬期植栽の大苗は約3m、小苗は60cmほどに育っているとのことで、今後の成長が楽しみだ。

定年退職後にNGO活動を始め、語学学習から取り組まれたとのことで、故郷への環境貢献にがんばっておられる皆さんのお元気な様子が印象的だった。



冬期にショウジマツの大苗を植えている様子。

### ●報告内容一覧

第23回 呼倫貝爾地域緑化推進協力会(福田道治会長他、役員の皆さん)  
「呼倫貝爾(ホロンバイル)地域植林プロジェクト事業」

第24回 メダカのがっこう(中村陽子理事長、根本伸一副理事長)  
「佐渡トキ野生化支援プロジェクト」

# ご寄付を いただいた 皆様

2006年1月31日現在

2004年4月～2006年1月にご寄付をいただいた法人・個人は以下のとおりです(順不同、敬称略)

## 法人寄付

(株)アイ・エックス・アイ  
曙ブレーキ工業(株)  
アコム(株)  
旭化成(株)  
旭電化工業(株)  
アサヒビール(株)  
味の素(株)  
あすか製菓(株)  
アツギ(株)  
(株)アドバンテスト  
(株)穴吹工務店  
アメリカンファミリー生命保険会社  
安藤証券(株)  
(株)飯田産業  
(株)イオンファンタジー\*  
(株)井田両国堂  
伊藤忠エネクス(株)  
伊藤忠商事(株)  
伊藤忠テクノサイエンス(株)  
(株)イトーヨーカ堂  
稲畑産業(株)  
岩谷産業(株)  
エイベックス・グループ・ホールディングス(株)  
エーザイ(株)  
エスエス製薬(株)  
SMK(株)  
(株)エヌ・ティ・ティ・コム  
(株)荏原製作所  
王子製紙(株)  
大阪製鐵(株)  
大阪トヨベツト(株)  
岡部(株)  
沖繩電力(株)  
尾崎商事(株)  
(株)オーディオテクニカ  
オリックス(株)  
(株)オリバー  
花王(株)  
科研製薬(株)  
カシオ計算機(株)  
鹿島建設(株)  
鹿島道路(株)  
片岡物産(株)  
(株)桂川精製製作所  
(株)加藤製作所  
(株)角川ホールディングス  
(株)加ト吉  
かどや製油(株)  
(株)上組  
カヤバ工業(株)  
川田工業(株)\*  
キッコーマン(株)  
キヤノン(株)  
キュービー(株)  
共同印刷(株)  
協和発酵工業(株)  
極東貿易(株)  
麒麟麦酒(株)  
(株)きんでん

(株)金羊社  
クインタイルズ・トランスナショナル・ジャパン(株)  
栗田工業(株)  
栗林商船(株)  
(株)クレディセゾン  
黒田電気(株)  
グンゼ(株)  
(株)高知銀行  
(株)コーエー  
コクヨ(株)  
(株)小松製作所  
コムシスホールディングス(株)  
佐川急便(株)  
沢井製菓(株)  
(株)山陰合同銀行  
三機工業(株)  
(株)サンゲツ  
(株)シーイーシー  
シスコシステムズ(株)  
(株)資生堂  
シチズン時計(株)  
清水建設(株)  
住友電気工業(株)  
(株)ジャステック  
(株)ジャパンメンテナンス  
(株)住生活グループ  
昭栄(株)  
新光証券(株)  
(株)シンシア  
新東工業(株)  
新日本石油(株)  
住友商事(株)  
住友信託銀行(株)  
住友スリーエム(株)  
住友林業(株)  
(株)スリオンテック\*  
スルガ銀行(株)  
セイコーエプソン(株)  
積水化学工業(株)  
(株)セブンイレブン・ジャパン  
セメダイン(株)  
セレスティカ・ジャパン(株)  
センコー(株)  
千住金属工業(株)  
センチュリー・リーシング・システム(株)  
総合メディカル(株)  
ソニー(株)  
ソニー生命保険(株)  
(株)損害保険ジャパン  
第一交通産業(株)  
大王製紙(株)  
(株)だいがう証券ビジネス  
大成建設(株)  
ダイタン(株)  
大同メタル工業(株)  
(株)ダイドーリミテッド  
(株)ダイナシティ  
太平洋工業(株)  
大和ハウス工業(株)  
武田薬品工業(株)  
(株)タチエス  
田辺製薬(株)  
中越バルブ工業(株)  
(株)土屋組  
(株)ディー・エイチ・シー  
TFPコンサルティンググループ(株)  
(株)帝国データバンク  
帝人(株)  
(株)テーオーシー  
鉄道機器(株)  
テルモ(株)  
電源開発(株)  
(株)電通  
テンブスタッフ(株)  
東京海上日動火災保険(株)  
東京ガス(株)  
東京コカ・コーラボトリング(株)

東京電力(株)  
東京トヨタ自動車(株)  
東京トヨベツト(株)  
東京貿易(株)  
(株)東芝  
東芝イーエムアイ(株)  
東陶機器(株)  
(株)東北新社  
(株)東陽  
東洋鋼板(株)  
東レ(株)  
トーア再保険(株)  
(株)ドクターシーラボ  
凸版印刷(株)  
(株)巴川製紙所  
トヨタ自動車(株)  
(株)豊田自動織機  
豊田通商(株)  
トヨタ輸送(株)  
鳥居産業(株)  
長瀬産業(株)  
(株)中村自工  
(株)なとり  
ナブテスコ(株)  
(株)ナムコ  
南国殖産(株)  
ニチアス(株)  
(株)ニチレイ  
日揮(株)  
(株)日建設計  
日産自動車(株)  
日清オイログループ(株)  
日新製糖(株)  
(株)日清製粉グループ本社  
日神不動産(株)  
日清紡績(株)  
日東電工(株)  
(株)NIPPOコーポレーション  
(株)ニフコ  
日本オーチス・エレベータ(株)  
日本ガイシ(株)  
日本紙バルブ商事(株)  
日本金属工業(株)  
日本原子力発電(株)  
日本地震再保険(株)\*  
日本証券金融(株)  
日本水産(株)  
日本精工(株)  
日本製紙(株)  
日本製紙連合会  
日本大昭和板紙(株)  
日本たばこ産業(株)  
日本調剤(株)  
日本電気(株)  
日本農産工業(株)  
日本ヒューム(株)  
日本ペイント(株)  
日本レコードマネジメント(株)  
(株)ノーリツ  
野村ホールディングス(株)  
伯東(株)  
パシフィックコンサルタンツグループ(株)  
浜松ホトニクス(株)  
(株)パレスホテル  
(株)バンダイ  
阪和興業(株)  
(株)ピーエス三菱  
ピーコンシステム(株)  
日立キャピタル(株)  
(株)日立国際電気  
(株)日立情報システムズ  
(株)日立製作所  
(株)日立総合計画研究所  
(株)日立ハイテクノロジーズ  
ビューラー(株)  
ファナック(株)  
藤倉化成(株)

富士港運(株)  
富士写真フイルム(株)  
富士ゼロックス(株)  
富士通(株)  
(株)フジテレビジョン  
富士電機ホールディングス(株)  
フタバ産業(株)  
芙蓉総合リース(株)  
(株)フラスムジャパン\*  
北越製紙(株)  
HOYA(株)  
(株)ホリプロ  
本田技研工業(株)  
前田建設工業(株)  
松下電器産業(株)  
松下電工(株)  
丸八倉庫(株)  
美樹工業(株)  
三島製紙(株)  
三井物産(株)  
(株)三菱地所設計  
三菱重工業(株)  
三菱商事(株)  
三菱製紙(株)  
三菱電機(株)  
(株)三菱東京UFJ銀行  
三八五流通(株)  
ミヨシ油脂(株)  
(株)メイテック  
森永製菓(株)  
(株)ヤクルト本社  
(株)山武  
(株)山田洋行  
(株)ユーエスシー  
ユニ・チャーム(株)  
吉野石膏(株)  
ライオン(株)  
(株)リコー  
(株)菱食  
菱洋エレクトロ(株)  
リンナイ(株)  
レンゴー(株)  
(株)フタナエエンターテインメント

〈ビッグフットフォレストクラブ〉  
(株)アールシーコア\*  
(株)山崎建設\*  
(株)ビッグフット秀和\*  
(株)高勝の家\*  
(株)ウッドィハウス\*  
(株)ビッグフットL\*  
(有)安達住建\*  
(株)藤栄住宅\*  
橋本建設(株)\*  
西永建設(株)\*  
長電建設(株)\*  
吉澤商事(株)\*  
伊藤建設(株)\*  
(株)ビッグフット東海\*  
(株)高橋建築\*  
(株)ビッグフット京神\*  
(株)ビッグフット瀬戸内\*  
新生建設(株)\*  
中村建設(株)\*  
ビッグフット互助会\*

〈その他〉  
「エコパートナーズ」(愛称:みどりの翼)  
三菱東京UFJ銀行ボランティア預金寄付  
(株)ジェーシービー  
UFJニコス WAIWAIプレゼント  
(財)トラストGO  
積水化学自然塾

\*印は日本経団連非会員企業

## 個人寄付

青木淳美  
安形哲夫  
浅沼健一  
足助明郎  
阿比留 雄  
新井 陽  
荒木隆司  
飯田吉平  
井植 敏  
井奥博之  
井川正治  
池田守男  
池淵浩介

石井克政  
石倉大幹  
石坂芳男  
石塚義和  
伊豆詰次  
出原洋三  
市田行則  
伊地知隆彦  
市橋保彦  
一丸陽一郎  
井川正治  
伊藤謙介  
伊藤住吉

伊藤藤一  
伊奈功一  
稲垣紘史  
稲葉良眼  
井上輝一  
井上博信  
井上 貫  
井上雄次  
伊原保守  
井原芳隆  
今井恵美子  
伊原原龍一  
岩崎宏彦

岩瀬隆広  
岩月一詞  
上杉貞夫  
上田健仁  
上原 忠  
上原尚剛  
氏家純一  
牛久保雅美  
牛山雄造  
内山弘通  
内山山竹志  
宇都宮吉邦  
宇野允恭

浦西徳一  
遠藤 玄  
大木島 巖  
大久保尚武  
大澤純二  
大須賀洋郷  
太田 元  
太田正彦  
大竹公一  
大西 匡  
大林剛郎  
大林芳久  
岡部 聰

岡部達之介  
岡村宏太郎  
小川信也  
小川智子  
興津 誠  
奥田 碩  
奥山秀朗  
橘谷 省  
小澤忠彦  
二葉啓一  
鬼塚喜八郎  
小山田浩定  
寛 哲男

梶井英二  
片山政徳  
勝保恒久  
加藤順介  
加藤光久  
金田 新  
金子達也  
川上 博  
川島新一  
木内 栄  
岸 暁  
北 修爾  
北 要夫

北村必勝  
橋高克也  
木原 誠  
紀陸 孝  
銀屋 洋  
久保地理介  
熊谷 繁  
倉田能達  
栗岡莞爾  
栗林定友  
栗和田榮一  
小枝 至  
古賀信行

小暮正彰  
小西正巳  
小林秋道  
小林 料  
小林陽太郎  
小吹信三  
駒田邦男  
齊藤 潔  
坂口美代子  
坂本 宏  
佐々木 透  
佐々木 元  
佐々木真一  
笹津恭士  
真田元清  
三宮克弘  
塩野元三  
重久吉弘  
シゲマツカシ  
柴田昌治  
島本明憲  
下村 博  
蛇川忠輝  
十二町英之  
白井芳夫  
白根武史  
白水宏典

末長範彦  
末松哲治  
杉崎盛一郎  
鈴木和夫  
鈴木賢一  
鈴木 武  
スズキトシヒコ  
須藤誠一  
瀬尾隆史  
反町勝夫  
平 論  
高井正志  
田頭秀雄  
高橋 清  
高橋徳行  
高橋秀夫  
高橋和平  
高橋良治  
高原慶一朗  
高山 剛  
宝田和彦  
瀧本正民  
田口俊明  
武内宏允  
武田國男  
武田忠穂  
館 糾

立花貞司  
龍村 豊  
田中 勇  
田中 清  
田中健悟  
田中公毅  
田中久勝  
田中義克  
瀬尾隆史  
反町勝夫  
平 論  
高井正志  
田頭秀雄  
高橋 清  
高橋徳行  
高橋秀夫  
高橋和平  
高橋良治  
高原慶一朗  
高山 剛  
宝田和彦  
瀧本正民  
田口俊明  
武内宏允  
武田國男  
武田忠穂  
館 糾

豊田達郎  
豊田章男  
鳥飼一俊  
中井昌幸  
長井鞠子  
中川勝弘  
長沢誠一  
永島陸郎  
長瀬英男  
中谷 章  
長野吉彰  
長原萬里雄  
永松憲一  
中村公一  
中村典夫  
中村 弘  
中村雄二  
仲山 章  
名取小一  
新美篤志  
西川由朗  
西堤 徹  
西野敏克  
西野虎之介  
西村 正  
西村正史  
西本甲介

二橋岩雄  
仁瓶義夫  
丹羽宇一郎  
根岸修史  
野口忠彦  
信元久隆  
野見山昭彦  
野村高史  
羽賀昭雄  
橋本 徹  
長谷川康司  
畑 隆司  
八丁地 隆  
服部哲夫  
ハットリトオル  
堀 義一  
瀧田松一  
早川 勝  
林 正  
林田紀久男  
葉山稔樹  
原 宏  
樋口廣太郎  
久田修義  
秀平政信  
日比賢昭  
平井和平

平島 治  
平野浩志  
平山良明  
晝馬輝夫  
福井善久子  
福田美知子  
福武總一郎  
船野龍平  
古庄昭憲  
古田 武  
古谷俊男  
古橋 衛  
保木将夫  
堀籠登喜雄  
本庄正史  
前川真基  
前田又兵衛  
横原 稔  
真下正樹  
松井秀文  
松浦 侑  
マツサキタツヒコ  
松永隆善  
山口雄吾  
松本栄一  
松本國夫  
真鍋邦夫

真鍋豊男  
馬淵隆一  
満生英二  
三木繁光  
水巻武一  
御手洗富士夫  
三戸靖之  
宮崎茂彦  
宮原賢次  
宮原成夫  
宮原秀彰  
向笠慎二  
村上仁志  
村瀬治男  
村田嘉一  
茂木友三郎  
森 治男  
森岡仙太  
安居祥策  
安田友彦  
安原 正  
柳井俊郎  
山内康仁  
山口千秋  
山口憲明  
山口政廣  
山崎誠三

山崎 学  
山路克彦  
山田清實  
山田淳一郎  
山本昌司  
横井 明  
横田 昭  
横山 宏  
横山元彦  
吉田 健(ケン)  
吉田二郎  
吉田 宏  
依田 巽  
若山 甫  
脇村典夫  
和田文彦  
渡部早苗  
渡邊利利  
渡邊浩之  
渡 文明

〈ビッグフットフォレストクラブ寄付者〉

二木浩三  
矢島繁雄  
谷 秋子  
上村陽子  
川又真寛  
三須宏子  
白鳥陽子  
濱口洋子  
安田秀子  
菊地史孝  
成毛幸夫  
斉藤 一  
飯銅浩一  
冬賀 理  
石川裕美  
石田良彦  
小宮知幸  
小曾根秀信  
工藤美佳  
藤本博幸  
池田 均  
石井彰宏  
小松原孝道  
加藤美恵子  
林 文夫  
大内 隆  
野島 毅  
来城 毅  
加瀬さおり  
小山田伸治  
神宮綾子  
堀部朝広  
河合 透  
山弘之  
井手一孝  
吉田忠利  
田畑範行  
村田佳津江  
蓮本千春  
池松直文  
平山敏郎  
奥田健太郎  
三樹 哲  
小杉 慎  
遠藤英雄  
原田喜秀  
山田 浩

浦崎真人  
庵原晃一  
井上大輔  
木村 伸  
今田浩二  
菊池祥一  
内藤幸夫  
鎌田大樹  
本所宗政  
酒井 歩  
斉藤博明  
安島礼子  
藤橋あい  
瀬下未来子  
山本健介  
安田徹太郎  
佐藤洋孝  
松本浩司  
山下泉一  
飯沼紀子  
黒田祐子  
河内直彦  
岡本由美  
作川憲一  
跡路高弘  
長谷川淳一  
若林 桂  
廣井裕治  
平野 誠  
工藤秀信  
渡邊綾子  
記内良之  
岡水裕次  
佐藤清治  
芝 由紀  
吉田忠利  
河野光邦  
鎌田広道  
田中恵美  
前田由紀子  
平松一隆  
奥田健太郎  
鈴木康史  
廣田慎也  
羽切 知  
前田清一  
熊倉規彰

渡辺由紀子  
仁保明彦  
後藤佳彦  
佐藤友哉  
伊藤孝行  
細川大介  
森 寛範  
浅海直樹  
有野三雄  
窪 健充  
笠井輝久  
飯島麻友美  
山崎法夫  
佐藤史恵  
佐藤 優  
武藤忠士  
岡田泰好  
高木智一  
畑山陽子  
浅野目幸広  
松倉洋子  
伊藤康士  
佐々木恵美子  
菊地久宣  
後村善勝  
中嶋秀行  
鹿島幸恵  
佐々木純久  
夏堀勝幸  
渡辺正喜  
加藤貴之  
菅原二三夫  
成波郁代  
成田鉄也  
伊藤 馨  
岩田晋史  
斎藤幸一  
川口智規  
高橋幸子  
三上真司  
高橋勝平  
千葉郁夫  
木村幸博  
遠藤節郎  
野村昌弘  
青田文尚  
窪田 薫

菅野あや  
菊地かずみ  
亀川達郎  
林 章司  
佐藤宏信  
大坪由記子  
林 啓太  
佐藤大輔  
小林廣一  
高野正広  
長谷部徳明  
小関直人  
川原とさ子  
鈴木美咲子  
丑田智彦  
歌丸美佳  
安部 誠  
三上和子  
鈴木亮一  
杉本正洋  
高橋晃樹  
高橋隆司  
志田雄介  
宗像 寛  
福原紀子  
遠藤隆宏  
能藤克治  
阿部 宙  
肥後健一  
地引幸弘  
菅家伸一  
佐々木 巧  
菅野政仁  
宗像智樹  
長登直子  
石森秀典  
戸田充彦  
半谷貴史  
竹内成佳  
宮田直樹  
無木利直  
野崎儀憲  
安達正包  
高島みどり  
山中政司  
中村慎二  
近藤孝一

中島 健  
井上広和  
大貫不二子  
鈴木智史  
須田佳代子  
西島正彦  
近藤久子  
橋本時雄  
北村里志  
斎藤理恵  
土田恵美  
多田美奈子  
目黒 博  
小林孝幸  
星野文男  
上村和規  
西永 均  
久司一隆  
角田 俊  
月林浩一  
室山正英  
東 由香  
浜尾睦子  
加藤博昭  
工藤公照  
入江光司  
吉田 猛  
高木敏之  
石井 充  
三澤博史  
宮澤智子  
宮入俊人  
関 秀希  
長谷川芳隆  
西沢好巳  
有澤正秀  
吉村 睦  
桜井静香  
桃澤ひろ子  
岡田暁彦  
森本直也  
吉田憲史  
竹内園子  
山内新一  
高橋陽子  
酒井 章

甲村一也  
吉岡盛幸  
伊藤英門  
高橋裕和  
村瀬周二  
岩田明宏  
山本博之  
園師隆之  
高橋伸知  
杉本一之  
田中亜矢子  
服部宏輔  
清水 惇  
内田信吾  
宝木知代  
後藤正明  
伊藤昭子  
松井昭二  
野口伊八  
富田篤人  
宮治 誠  
小佐野 賢  
大橋政彦  
福岡茂樹  
神野大輔  
黒木崇司  
小寺詢一郎  
中井朋子  
鷲見和広  
篤頭 忍  
松井美樹  
勝崎香奈  
橋本好正  
三井 健  
石塚健一  
清水丈裕  
木下朋子  
筒井幹雄  
甲斐邦彦  
小畑年範  
田中琴美  
常深雅子  
大谷宏之  
須田智彦  
庭田隆一  
宮田真次  
斉藤康二

見崎義輝  
梶田衣里子  
村瀬敏彦  
深田久美子  
高橋裕和  
山根清美  
山本博之  
里中伸弘  
中松亮一  
松本真一  
森本真人  
新井文夫  
山崎賢一  
澤 正明  
樋ヶ穀彦  
若越二  
高田直司  
北脇照樹  
紺野風子  
前田仁司  
酒井由雄  
大藪栄子  
嶋田剛司  
高橋麻子  
合田 智  
川口真輔  
植本 隆  
西本豊美  
奈良 隆  
清川賢仁  
山中邦夫  
中山 豊  
中村章史  
柳 雅弘  
古迫勝弘  
上野山裕子  
藤川晶崇  
山本景弘  
山本けい子  
峰山光男  
竹内洋子  
平尾ひろみ  
成松繁樹  
室山慎哉  
井山良彦  
浅野訓正  
岡本尚久

田尻卓也  
野崎建二  
鼻 功  
中村慎一郎  
藤井祥子  
田中達也  
麻生高行  
丸川雅紀  
高橋 満  
野田承治  
内田健二郎  
濱田美智子  
久保田賢一  
佐藤聖志  
藤岡立志  
吉野耕一  
大塚千春  
河村秀樹  
河村典子  
末永雅之  
森重辰夫  
小笠原武也  
井本優子  
中村光雄  
吉成朝子  
佐伯達矢  
知中嶋達也  
中村 光  
小松美絵  
中村章子  
小段和彦  
堤 雅桂子  
岡田崇志  
池田裕樹  
八原正治  
上野美穂  
江崎志志  
土肥 純  
伊東正弘  
佐々木麗子  
佐藤隆隆

From Editors

●言われれば気がつくことも、自分ではなかなか気がつかない。言われれば分かることだが、なかなか行動に結びつかない。言葉の中に、はっとさせられるような、人の心に響くものがある。マータイ環境副大臣の「MOTTAINAIと自然保護」の講演を聞いた人たちは、今もなお、その感動の余韻を心に残しているのではないのでしょうか。(真下)  
●マレーシア・インドネシア視察ミッションで、鈴木 晃博士が野生オランウータンの観察・保護に当たっておられるクタイ国立公園のサイトを訪問した。今でこそ、近郊都市から半日ほどで現場にたどり着けるが、二十数年前はボートで数日

をかけ、河岸のテントで寝泊りされたとのこと。博士から直接お聞きするオランウータン研究の奥深さ、楽しさ、あくなき探究心とそれに伴う苦労談など、学問を究めることの厳しさ、深遠さ、真理を追究される人の孤高さなどに凡人なりに想いを馳せた。(末松)  
●マータイさんとのフォーラムは満員盛況で好評だった。その真摯な姿、自信に満ちた語り口に感動したとの声をたくさんいただいた。われわれもこの感動を受けて、新たな実践を進めていきたいと思う。新年度を控え、新たな計画に夢を描ければと思う。(谷口)

# 視察報告

マレーシア、インドネシア



# マレーシア、インドネシア 自然保護プロジェクト 視察報告

日本経団連自然保護協議会は、公益信託日本経団連自然保護基金が支援しているプロジェクトの活動状況の視察や現地政府、NGOとの交流を目的として、毎年ミッションを派遣しています。2005年度は11月26日(土)～12月3日(土)に、大久保尚武会長以下、参加者13名がマレーシア・サラワク州、インドネシア・東カリマンタン州の活動地を訪問しました。

## ミッションの概要と団長所感

日本経団連自然保護協議会 会長 大久保 尚武

### ●マレーシア・サラワク州にて

最初の訪問先であるマレーシア・サラワク州では、社団法人日本マレーシア協会が行っている「サラワク州での熱帯林再生プロジェクト」の活動地を視察した。現場はボルネオ島にあるサラワク州都クチンより車で約2時間の距離にあるアペン保護区である。サラワク州は63%を熱帯雨林で占め、8000種を超える植物や2万種を超える動物(主に昆虫類)が生息するなど生物多様性の宝庫となっている。しかし近年、過剰伐採や森林火災による環境悪化が危惧されているとのことである。日本マレーシア協会では10年前よりサラワク州森林局に協力して2740haの植林計画を立て、複合林の試験的導入や植林の技術指導等を進めている。

クチンから途中、セリアンに立ち寄り、さらに30分ほど走ると辺りはアブラ椰子のプランテーションが広がる一帯となる。多様性のない不自然な森が続く。マレーシアでは椰子の実油の生産が盛んで、サラワク州の他、半島側でも飛行機の上から確認できる大プランテーションが広がっている。これらの多くは植物油として加工され、日本などに輸出される。

現場に着くと、地元の人たちや森林局の関係者など総出でわれわれを大歓迎してくれた。ジョセフ・ジャワ森林局長からは「既に300haの植林を支援していただいていることで、住民の間にも熱帯林の保全と再生の意識が生まれています。経団連からの支援に感謝しています」

との挨拶をいただいた。その後、参加者による記念植樹を行い、各戸10本の苗木を植えることになった。暑い中での植樹はかなり大変な作業で、大汗をかきながら苗木を植えた。名前の刻まれたプレートをつけていただいたが、1年後には5～6mにもなるとのこと、その成長の早さには驚かされる。植樹の後は日頃から協力してくれている地元の人たちと昼食をとるなど交流会が行われたが、改めて熱帯雨林の重要性を感じた次第である。

夕刻、ハジ・ハムデン・アハマド・サラワク州観光・青年担当副大臣をはじめ、サラワク州森林局の幹部、在コタキナバル日本総領事館の小西力哉副領事、日本人会の梅内清一会長らが出席して懇親会が行われた。アハマド副大臣は「クチンの森林運営はマレーシアで一番よくやっている。経団連およびマレーシア協会の援助で植林活動が進んでおり、今後とも友好関係を続けていきたい」との挨拶をいただき、日本人のこれまでの活動が地元でも十分評価されていると感じた。

### ●インドネシア・クタイ国立公園にて

次に訪れた、インドネシアのクタイ国立公園では、鈴木 晃博士(元京都大学霊長類研究所所長)が代表を務める日本・インドネシア・オランウータン保護調査委員会の「東カリマンタン州の野生オランウータン保護・調査プロジェクト」の活動地を訪問した。鈴木博士は、クタイ国立公園周辺での調査・研究活動を20年にわたり続けている世界的なオランウータン研究者である。

ボルネオ島・インドネシア領の一大石油産出地であるバリックパパンから飛行機で1時間、タンジュンバラに向かった。ここは世界最大級の

## ■視察ミッション参加者名簿

### 【団 長】

大久保尚武 日本経団連自然保護協議会 会長、積水化学工業株式会社 社長

### 【副 団 長】

前田又兵衛 日本経団連自然保護協議会 副会長、前田建設工業株式会社 取締役名誉会長 \*ボルネオ島のみ参加

### 【団 員】

小原 好一 前田建設工業株式会社 執行役員 経営管理本部総合企画部長 \*ボルネオ島のみ参加

西堤 徹 トヨタ自動車株式会社 環境部企画グループ 担当部長

木内 栄 前田建設工業株式会社 安全環境部環境グループ 副部長

石原 博 住友信託銀行株式会社 企画部社会活動統括室 審議役

青木 滋 本田技研工業株式会社 社会活動推進室 主幹

島 治 株式会社東芝 社会貢献室 参事

鷹見 雅夫 住友林業株式会社 環境経営部 チームマネージャー

花谷 全康 関西セキスイ工業株式会社 総務部総務課

### 【事 務 局】

末松 哲治 日本経団連自然保護協議会 事務局 局長

貞下 正樹 日本経団連自然保護協議会 顧問

谷口 雅保 日本経団連自然保護協議会 部長

(敬称略・順不同)



石炭露天掘りの事業が行われている所で、飛行機の上からも山から港に向かって石炭輸送用のコンベヤーが伸びているのが分かる。空港から渡河地点に至る周辺は1997～98年に大規模な森林火災が発生したとのことで、いまだに所々に焼け残った高木が見られる。

20分ほどボートで移動し、クタイ川を遡り、調査基地「キャンプ・カカップ」にたどり着いた。鈴木博士が初めて調査に入られた頃は遥か河口からボートに乗っていかねばならない僻地だったようだが、石炭開発により、今では街ができ、道路も整備された。キャンプ・カカップでは、国立公園内での現地政府との協力関係や、森林の維持・管理に関する課題など聞かせていただき、その後、オランウータン観察のため熱帯林の中を歩くことになった。スタッフが生態調査のため、1日中オランウータンの後を追いかけており、現在位置がすぐ分かるので20分ほどで、高木の上で木の実や葉っぱを食べているオランウータンを見つけることができた。当日は結局親子も含め、4頭のオランウータンに出会うことができた。この日は遅くまで鈴木博士や奥様、お嬢様からお話を聞き、結局、私を含め4名がキャンプ・カカップに泊まらせていただいた。熱帯林の中での一日は大変快適で、すがすがしい気分で朝を迎えられた。

翌日はKPC社の石炭露天掘り事業場を見学した。オーストラリア資本で開発が始まり、現在は100%インドネシアの資本となっている。年産2800万トンの採掘が行われ、その多くは日本、タイ、韓国などに輸出されている。水や空気の汚染、廃棄物の処理、掘削後の復元などは大きな問題で、KPC社としてもさまざまな対策を施している。特に植林による復元活動は重要で、事業場内には植林のための研究場や育苗場も整備されている。この辺りも開発前はオランウータンの棲む森であり、川一つ隔てた国立公園の様子と見比べると、開発と自然保護のせめぎあいを感じる次第である。

## ●ジャカルタにて

ジャカルタでは日本大使館の黒木雅文行使、川口大二書記官を交えて、インドネシア政府のカツラ副大統領、カバン林業大臣、ウイットウール環境担当大臣らを表敬訪問した。林業省は生物多様性や国立公園を管轄し、環境省は地球温暖化や都市環境を管轄している。日本の経済界が取り組んでいる自然保護活動の紹介や、国立公園での人の生活と環境保全の衝突、違法な森林伐採、実業界との協力等についての話題が出された。

この後、ジャカルタ日本人クラブの会員の皆さんにご出席いただき、鈴木博士よりオランウータンの保護対策について報告会を行っていた。

## ●ボゴールにて

最終日は、社団法人日本環境教育フォーラム(JEEF)の活動報告会と世界的に有名な植物園の見学のために、ボゴールまで足を延ばした。JEEFの矢田 誠さんは、ボゴール市内からバスと徒歩で2時間ばかりの所にある活動地で、2年にわたり、住民たちの知識や経験を皆で共有した、持続可能な生計維持活動に取り組んでいる。

1817年に設けられたボゴール植物園では、世界の珍しい植物が集められた広大な敷地の中で、豊かな緑を堪能した。

## ●所感

今回のミッションでは、大変貴重な経験をすることができた。ボルネオ島はかつて人の出入りを拒む自然豊かな秘島であったが、石油や石炭、熱帯林など、自然資源も豊かであったため、今では開発の波にのみ込まれようとしている。空路などのアクセスが整備され、おかげでわれわれも野生のオランウータンが息する森に入ることができたわけである。開発の恩恵を受けているわけだが、そのために失ったものも大きい。はるばる日本から活動のためにボルネオ島に来ているNGOの皆さんの行動力、熱意にも敬服する。貴重な生態系、生物多様性を守るために経済界全体の問題として、今後もできる限りの支援は行っていきたいと考えている。



ミッション参加メンバー。



ジャカルタで表敬訪問したウイットウール環境担当大臣と懇談する大久保尚武会長。

## ■視察ミッション日程(2005年11月～12月)

11月26日(土)	成田発→クアラルンプール→クチン着	【クチン泊】
11月27日(日)	日本マレーシア協会・活動サイト視察 サラワク州アハム副大臣らと懇談	【クチン泊】
11月28日(月)	クチン発→クアラルンプール→ジャカルタ→バリックババン着	【バリックババン泊】
11月29日(火)	バリックババン発→タンジュンバラ着 日本・インドネシア・オランウータン保護調査委員会・活動サイト視察	【センガタ泊】
11月30日(水)	KPC社石炭露天掘り事業所見学 センガタ発→バリックババン→ジャカルタ着	【ジャカルタ泊】
12月1日(木)	現地政府・日本大使館等表敬訪問、オランウータン保護対策について報告会、政府関係者・インドネシア日本人会・NGO等との懇談	【ジャカルタ泊】
12月2日(金)	ジャカルタ発→ボゴール着 日本環境教育フォーラム活動報告会、ボゴール植物園見学等 ジャカルタ発→翌日、成田着	

# ボルネオ視察ミッションのご訪問を受けて

社団法人日本マレーシア協会 専務理事 新井 卓

## ●プロジェクトの活動状況

南洋材などを通じて、わが国と密接な関係あるボルネオ島では、近年、伐採が次第に奥地水源地域にまで及び、さらに伐採跡地に焼畑耕作が浸透し、自然環境の悪化が急速に進みつつあり、大面積の熱帯雨林破壊による地球環境悪化が強く危惧されている。

そんななか、本協会では、ボルネオ島に位置するサラワク州政府および地域住民の協力のもと、同州バライ・リンギン保護林内において地域生活環境改善活動を行い、1995(平成7)年度から5年間で300haの地域に約6万本の在来種等の植林を実施した。

その成果を持続的な熱帯雨林保全に役立ててほしいとの州政府および地域住民からの要望に応え、同州アペン地域保護林において、同州政府および地域住民の全面的な協力を得て、人間社会への影響が大きい熱帯雨林の持続的な再生プロジェクトを実施している。なお、同プロジェクト地(森林全体面積3855ha、植林面積2740ha)は、州都クチンから南西約100キロの地点で、インドネシア国境に近い、一部山林丘陵地帯がある広大な原野である。

東南アジアの中心に位置するボルネオ島北部を占めるサラワク州には、総面積の63%を占める熱帯雨林に8000種を超える植物や2万種もの動物が棲息するといわれている。特に、ボルネオ島は熱帯雨林の主役であるフタバガキ林の宝庫(全樹種の半数を超える287種が生育)であり、環境の悪化によって重要なフタバガキ科樹木群も深刻な危機に直面している。

そこで、本プロジェクトでは、自然即応式によるフタバガキ科在来種(エンカパン、カポール等)の植林・保育を実施している。植林は1ha当たり200本、ライン・プランティング方式(5×10m)で行う。苗木の植えつけ後の成長は0.3m~0.5m/年であり、日陰のある林内ではよく成長している。

具体的な活動内容は主に、①熱帯雨林を中軸とした生活環境整備と啓蒙活動、②ライン・プランティングによる在来種の植栽・保育、③植林地域内の林道補修、④専門家による技術指導、⑤調査研究と資料の作成、⑥日本ボランティアと地域住民との共同作業による植林の実施などである。

本プロジェクトによって、人類の生活に不可欠である熱帯雨林における生物多様性を保護し、熱帯雨林の再生・保護と同時に複合森林整備の研究・実践を推進し、持続的な環境保全を推進していくことが最大の課題であり、それによって伐採や焼畑の繰り返しによる環境悪化を防ぎ、また、住民の自立を促すことで隣接地域への波及効果も期待している。

## ●ミッション訪問を受けて

昨年11月26日~28日、日本経団連自然保護協議会の自然保護プロジェクト視察ミッションがサラワク州を訪れ、本協会のプロジェクト地を訪問していただいた。私も、同日程で現地入りし、プロジェクト地などをご案内することができた。

13名からなる視察ミッションの方々には26日深夜にクチンに到着し、翌27日早朝にプロジェクト現場へ向かい、雨季の中の好天のもと、現状視察とともに各々10本の植林を体験していただいた。約1時間、汗だくになりながら、近隣地域に住むボルネオ先住民のビダユ族の村人とともに植林。その後、簡易テントで、村人、森林局スタッフらとともに昼食を食べながら、一時の交流を楽しんだ。

同日夜は、クチン市内ホテルで州政府ならびに日系企業関係者とのレセプションを開催し、ハジ・ハムデン州政府代表・観光青年副大臣らと、自然保護に向けた取り組みなどについて意見交換をした。

翌28日午前クチンを出発し、クアラランプール、ジャカルタ経由でカリマンタン側に向かうという強行日程にもかかわらず、団員の皆様の自然保護へかける強い使命感と熱意に大いに感銘を受けた。

帰国後、12月9日の日経新聞夕刊に、大久保尚武会長がコラムを寄せ、今回視察した活動地がともに開発と自然保護の境界線に位置したことから「日本古来の自然観からすると、人も自然の一部である。保全か保存かは必ずしも対立するものでなく、両立させるべきもの」と、視察訪問の印象を書かれていた。

まさに私どものプロジェクト地はパーム椰子の大規模プランテーションと境界線を接しており、今後は、開発とのバランスと、農園跡地における森林回復の方法などについて、いかに現地側と協議し、実施していくかなど、大きな示唆と重要な課題をいただくことができた。

## オランウータンの森よ、いつまでも!

~経団連自然保護協議会ボルネオ島視察団・クタイ国立公園来訪に寄せて

日本・インドネシア・オランウータン保護調査委員会 代表 鈴木 晃

## ●石炭開発で一変したセンガタ村と野生のオランウータン

昨年11月29日、日本経団連自然保護協議会のボルネオ島視察団のメンバー13名の来訪を、私はオランウータン調査基地「キャンプ・カカップ」で迎えた。キャンプのあるセンガタ川沿岸は、もともとは細々と焼畑生活で暮らしてきた人たちの森と土地であった。私のオランウータンの保護調査活動に研究に協力してくれた村人たちが、自力でキャンプの建物をつくったのが1994年であった。

91年から始まった石炭開発は、この地をめまぐるしく変えてしまった。私は石炭開発が進められていく丘陵の道を一行を迎えるために空港へ走りながら、この土地のすさまじい変容を思い、胸が熱くなる思いを抑えることができなかった。道の左側は露天掘りの石炭採掘で大きくえぐられ、右側の原野は今も木立もなく、7年前の2度目の大山火事の後には、葉の落ちた木立の中におびたしいオランウータンの巣があった光景が脳裏をよぎっていた。「開発と環境との調和」。それは言うにはやさしいが、現実には大変困難であることも私は実感していた。

視察は現地で一泊の強行軍であったが、調査地に生息する50頭余りのオランウータンのうち、母子と若者の4頭を限られた時間の中で見ることができたことは幸いであった。この森のオランウータンは、どこにもあるリハビリの人馴れしたものと異なり、真の野生の集団であることに特徴がある。2歳のチャーリーはいつも観察者に手を振って私たちの関心をひきつけようとするのだが、大勢がやって来たので奥の湿性林の方へ移動していった。バクルは人に慣れているので絡まったツルの茂みから出て来て、全身を一行に見せてくれた。大久保尚武会長はじめ、4名の方に木造のキャンプの部屋に泊まっていたことにも私にとって思い出深いこととなった。また、遠路の疲れも見せず、翌朝出発前、まだ巣の中で休んでいるバクルに朝の挨拶に出かけた真下正樹顧問の熱心さにも敬服した。

私のオランウータンの調査とこの地での保護活動は、83年の初めての森林火災の直後から始められた。人類史上初めての熱帯林の大火災だといわれたが、その後、98年にも2回目の火災に見舞われた。オランウータンはそのような森で生き続けてきた。石炭採掘のダイナマイトの発破音に応じて、必ず森のどこかでオスのオランウータンが鳴った。

センガタ川両岸で暮らしてきた住民は、36年の保護地指定によって、川の南側の土地を失い、さらには90年代になって石炭開発で北側の土地も失い、住む所をなくした。私が最初にこの地に入った当時、センガタ村は人口3000人に満たない寒村で自動車は一台もなかった。それがここ数年で人口5万人余りの県庁所在地に膨れ上がり、自動車のひしめく開発の都になってしまった。30年余り続いたスハルト政権の崩壊後、あふれた人口は国立公園への不法入植者となった。私たちは、このような混乱した情勢の中で、国立公園、石炭会社等と懇談を行い、オランウータンと森を守る活動を続けている。

### ●今後のオランウータン保護・調査のあり方

私は今、オランウータンの保護と調査の今後の姿として次のようなことを考え、インドネシア側研究者、林業省、国立公園との間で話を進めている。

林業省との研究センターのMOU(覚書)に沿って、センターの創設と調査研究地周辺の整備と観察路整備を含めた、伐採禁止のためのパトロール制度の強化。

- 2) 北部石灰岩地域の国立公園化のための、基盤的調査の推進。
- 3) 野生オランウータンの広域での分布調査。国立公園バッファゾーンの植林を含めた整備計画とリハビリ事業の見直し。

今回、副大統領、林業・環境両大臣にそれぞれ表敬訪問を行い、オランウータンの保護について一言進言できたことは、上記の次項を達成していく上で大変役立ったと思っている。夜はレセプションがあり、オランウータンの話をさせていただいた。一行が帰国後、カバン林業大臣がカリマンタン島の10人の県知事を森林違法伐採協力の件で告訴したとのニュースが新聞で伝えられた。

私の22年間の現地での保護調査活動の中でも、今回その現状を見ていただいたことは何よりの励ましになったし、感動的な時間の経過であって、よい機会をつくっていただいたことを皆様に心から感謝いたします。

## ■参加レポート

### 自然保護と開発の間にある大きなギャップ

日本経団連自然保護協議会 副会長、前田建設工業株式会社 取締役名誉会長

#### 前田 又兵衛

二十数年ぶりのクチンであった。そして美しいクチンに感動した。“nature protection”とされていた自然保護活動は、今日“nature conservation”といわれている。人間本位の見地から自然を見るということではなく、自然と人間がいかに共存するのかということに主題が移ったことを意味するのだろう。

今回は、マレーシア・サラワク州における「熱帯雨林再生プロジェクト」と、インドネシア・東カリマンタン州の「オランウータン調査プロジェクト」を視察する機会を得た。両プロジェクトとも、自然保護と開発が混然一体となっており、熱帯雨林再生現場の隣ではアブラ椰子の植えつけが行われ、オランウータンの生息地近くでは世界一といわれる石炭の露天掘り現場が稼働している。

私には「自然保護」と「開発」の間に、あまりにも大きなギャップを感じさせられたのである。「共存」のためには、その間に何か時間を越えた緩衝対策が必要なのではないだろうか。マレーシアの熱帯雨林再生現場を訪れた際、歓迎してくれた現地の子どもの目もまた輝きが忘れられない。それは何を訴え、意味するものかを深く考えねばならない。

### 日本の経験を アジアの環境保全に生かしたい

前田建設工業株式会社 執行役員 経営管理本部総合企画部長

#### 小原 好一

今回の熱帯雨林再生活動およびオランウータンの保護活動に対する日本経団連自然保護協議会の視察ミッションに参加させていただき、「自然保護」と「開発」の実態をこの目でじかに見ることによって、これら相反する行為間の共存の難しさを痛感した。

「開発」による住民の生活レベルの向上、またその「開発」による将来における住民生活の破壊、その間の調整、判断には非常に難しいものがある。

現在の日本では、ここ数年、「CSR」の概念が社会に大きく取り入れられてきている。これは、1970年代の公害問題に端を発し、環境問題から企業の不祥事問題等を経て、今の「CSR」につながってきているものだと思う。やはり、日本はこの経験を生かし、中国をはじめ東南アジアへの「環境保全」分野での助言を果たしていくべきなのであろう。

### “経済”と“環境”の両立に 重要な役割を果たす協議会

トヨタ自動車株式会社 環境企画グループ 担当部長

#### 西堤 徹

昨年に引き続き、ミッションに参加させていただいたが、ほぼ赤道直下のボルネオ島の気候は非常に厳しかった。マレーシア側の日本マレーシア協会サイトでの日中の植林は、5~6本植えただけで全身から汗が噴き出してきた。インドネシア側の鈴木 晃先生のサイトでは、木の上を移動するオランウータンを追いかけて、熱帯雨林の中を5分歩いただけで、軽い脱水症状に見舞われた。こうした中で、長期間にわたって、情熱を持って現地の方と一緒に活動を続けておられるNGOの皆さんの努力は素晴らしい。

今回、特に印象深かったのは、オランウータン保護サイトと川を一つはさんだ場所で、大規模な石炭の露天掘りが行われていたことである。まさに“環境”と“経済”の両立の可能性を実験しているかのような強烈な光景だった。

日本経団連の役割は、途上国の経済発展に協力するとともに、もう一方では自然環境を保護し、“経済”と“環境”の両立を支援していくことであるということ、を、再認識させられた。

## 「生物多様性の宝庫」を訪れて

前田建設工業株式会社 安全環境部環境グループ 副部長

木内 栄

未明に到着した蒸し暑いマレーシア・サラワク州クチンから、翌日はアペン地区保護林へ。ここでは、サラワク森林局員や地元村人たちの助けを借りて行った記念植樹で心地よい汗をかき、村人たちとともに森を守りたい・復元したいという日本のNGOの方々の気持ちがひしひしと感じられた。

インドネシア・東カリマンタン州タンジュンバラ空港へは快晴の空路。クタイ国立公園を中心とした周辺地域では、「緑の絨毯」が諸所、虫食い状態であった。この地区で一人の日本人が自然保護のために身を投じている姿を見ると、企業人として「環境-経済」の均衡をいかに進めたらよいか考えさせられるものがあった。

両国政府ともに熱帯林の保護活動を推進しているというものの、何億年とかけてできた熱帯林の生物多様性は人類の財産であり、国際的かつ多面的な支援活動が必要であると痛感したミッションであった。

## 進まざる者は退く

住友信託銀行 企画部 社会活動統括室 審議役

石原 博

今回現地を視察した2つの自然保護プロジェクトが、いずれも経済と環境、あるいは開発と自然保護のせめぎ合いの直中にあつたのは、おそらく偶然ではあるまい。

世界中の至る所で、このようなせめぎ合いが日々繰り広げられ、その中でNGOの皆さんが、地道にかつ忍耐強く活動を続けておられることに、敬意を表さざるを得ない。

福沢諭吉は『学問のすずめ』の中で、「進まざる者は必ず退き、退かざる者は必ず進む」と説いたが、自然保護も手をあげれば必ず後退するし、辛抱強く続ければ必ず成果が現れる。

私たちのたゆみない支援活動が、自然保護に汗水を流しておられるNGOの活動の原動力となり、経済と環境の両立に役立つことを願っている。

## 相反する命題にどう答えを出すか

本田技研工業株式会社 社会活動推進室 主幹

青木 滋

「20年間、ここを拠点にオランウータンの研究をしています。最初の10年間はブルーシートで雨をしのぎ研究を行いました」

鈴木 晃先生のオランウータンの研究に賭ける並々ならぬ信念に驚かされた。20年間の研究で、オランウータンは50歳でまだ子どもを生むこと。そして、相当長生きをするらしいことなどが分かってきた。しかし、まだまだ分からないことが多い。本当に地道な研究があって、オランウータンの生態が少しずつ分かってきたのだ。

そのオランウータンが石炭採掘という開発により、生息範囲を狭められている。採掘された石炭は日本にも輸出され、製鉄などに使われている。鉄がなければ、われわれは豊かな生活を営むことができない。オランウータンの生息範囲を狭めることは、長期的には人間の生存を脅かすことにつながる。豊かな生活を求める人間の欲求と自然環境の保護、相反する命題にどう答えを出したらよいのだろうか。

## 活動継続には 現地の人たちの取り組みが重要

株式会社東芝 社会貢献室 参事

島 治

このミッションでは、日本マレーシア協会が植林プロジェクトを展開しているアペン保護区と鈴木 晃博士がオランウータンの保護活動を続けているインドネシアのクタイ国立公園内のサイトを視察した。いずれのサイトも地域経済を支える、それぞれパームヤシ畑、石炭採掘場が隣接する中で、地元住民とともに自然保護の活動を続けているというものだった。現状では、両活動とも日本人が活動の中心となっていたが、今後もこの活動が続いていくためには、現地の人たちが真剣にそれぞれの問題に取り組み、活動の前面に出てきて立つつもので、両者ともそれが徐々に進んできているのを実感した。

大久保尚武団長、前田又兵衛副団長をはじめ、日本経団連自然保護協議会事務局の真下様、末松様、谷口様のご尽力に対し、この場を借りて御礼申し上げます。



植林方法を説明する(社)日本マレーシア協会の新井 卓専務理事(写真中央)とジョセフ・ジャワ森林局次長。



プロジェクト現場にて、地域の人たちや森林局スタッフらと。

## 日本人NPO関係者の真面目さに脱帽

住友林業株式会社 環境経営部 チームマネージャー

鷹見 雅夫

今回のミッションは、マレーシア、インドネシアの支援に対して支援先の実態がどうなのかを現地で見極めるのが目的であった。視察地は、マレーシアの「日本マレーシア協会サイト(アベン保護区)」、インドネシアでは「日本・インドネシア・オランウータン保護調査委員会サイト」と「日本環境教育フォーラム・報告会」という3カ所に加え、クタイ国立公園に隣接する「大規模な石炭露天掘り現場(KPC社)」の見学であった。

それぞれの活動地では、活動目的を果たすべく努力されていることが確認できた。さらにインドネシアでは副大統領、環境大臣、林業大臣を表敬訪問し、貴重な会場の持つことができた。

マレーシア、インドネシア両国政府は、政府要人の言葉からそれぞれ「経済活動と自然環境保護とのバランス」の難しさに対し、模索している状況が感じとれた。政府関係者は国際的なNGOとの交渉の中で、自然保護に対して十分対応していると自信を持った説明をしているが、一方では違法伐採が依然存在していることも認識している。

今回のミッション視察地では、日本人の手による活動で、自ら汗を流し活動されている姿を確認し、日本人のNPO関係者の真面目さに脱帽した。かなりハードな日程だったが、現地確認という目的は果たせたと思う。それは、視察にあたり、事務局の事前準備、現地大使館の十分な支援、関係者の支援があつてのことであり、全員無事予定通り帰国できたことに感謝したい。皆様お疲れ様でした。

## “木の上の住人”も 安心して生活できる環境を

関西セキスイ工業株式会社 総務部総務課

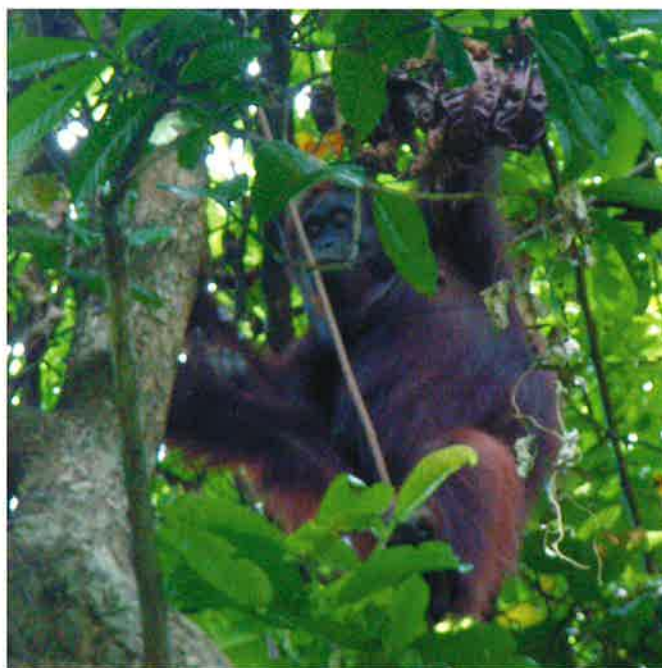
花谷 全康

活字や映像の情報だけでは得ることのできない人と人の心の触れ合い、ボルネオ島の自然が持っているポテンシャルの大きさを肌で感じることができた視察だった。各サイトとも心待ちの歓迎があり、子どもたちの笑顔が印象に残る。子どもたちとその次の世代が大人になる頃、自然豊かな地球となっていることを願いながら、各人がカポールの苗木10本ずつを記念植樹した。鈴木 晃博士をはじめスタッフの体験談を聞き、オランウータンに対する熱い思い、強い意志を持った貪欲な姿勢に心を打たれた。“木の上の住人”にも安心して生活できる日が来ることを願う。

私たち一人ひとりは一地球人(地球の一住人)であることを忘れてはならないと再確認すると同時に、今後、日本経団連自然保護協議会の活動の大切さをさらに理解してもらい、支援の輪を広げていかなければならないと感じた。



植林サイトの近隣に住むボルネオ先住民のピダユ族の村人たちと交流。



姿を見せてくれた野生のオランウータン、ウイウイ親子。



クタイ川をボートで移動。写真右より鈴木 晃博士、木内、真下、前田、大久保の各氏。



クタイ国立公園に隣接する露天掘りの石炭採掘現場。

連載

企業が進める  
自然環境教育の現場を訪ねて

4



スギの間伐地を通り、作業現場に向かう参加者の皆さん。

富士ゼロックス

# 成田里山づくりの会

自然保護や環境保全のために、企業自ら地域の人たちやNGOとともに積極的に取り組んでいる事例が増えてきました。

そのような企業活動の様子を現場に向向いて取材し、シリーズで発信しています。

今回は、社員やその家族、そして地域の人たちと一緒に里山づくりを続けている、富士ゼロックス株式会社とその関連会社と取り組む「成田里山づくりの会」の現場を訪ね、活動体験してきました。

全国に先駆けて制定した「里山条例」の推進に力を注ぐ大槻幸一郎千葉県副知事も、公務多忙のなか、企業と地元と行政の三者が協働する里山づくりにご参加いただきました。

※取材：2006年2月25日、事務局／真下

## 富士ゼロックスの環境方針と「成田里山づくりの会」

環境方針としてエコ・リテラシー教育を重視する富士ゼロックス。全従業員が受講できる環境基礎教育を進める一方、従業員自らが体験することで、環境貢献に主体的に取り組む姿勢を育成することを目指しています。社員自らが実際の活動に参加し、地域に根付いた活動や次の世代を担う子どもたちへの教育活動など、これらを支援する社内環境教育体制が整えられているのです。

富士ゼロックスでは、今回ご紹介する「成田里山づくりの会」のほか、宮城と山形の「社蠅の森を慕う会」、鈴鹿の「さかなの目の会」、多摩での「東京グリーンシップ・アクション」への参加、また同社の神奈川県塚原研修所の山林における「塚原の雑木林を守る会」の地域と共存し里山林を育てる取り組みなど、全国で多彩な環境教育活動を展開しています。

「成田里山づくりの会」は、富士ゼロックスの環境貢献意識と、千葉県が県下に活動を広

めようとしている「里山条例<sup>\*</sup>」の趣旨とが一致、さらに土地所有者のご協力を得て、2004年3月にスタートしました。

活動拠点をご提供いただいているのは、この地域の大地主である石井勝美さん。そして、里山保全活動の仲介役でありサポートとなっているのが、千葉県農林水産部みどり推進課と「ちば里山センター」です。条例に基づく「里山活動協定」を所有者の石井さんと結び、富士ゼロックスならびにその関連会社の人たちと、地元の方々との触れ合いを通じた、自然保護と環境教育の実践活動を着実に進めています。

### \*「里山条例」とは

正式名称を「千葉県里山の保全、整備および活用の促進に関する条例」といい、全国に先駆けて03年5月に施行された。県、市町村、土地所有者をはじめ、ボランティア団体、企業などが協働して人と里山の新たな関係を構築し、次代に引き継ごうとするもので、先人の叡智で人と自然の営みが調和してきた里山を幅広く理解してもらい、その保全を進めようとするものである。

## 千葉県副知事大槻幸一郎氏に聞く 里山と私たち

大槻副知事は、ササなどの下草が茂る杉林を、慣れた足取りで今回の活動に参加。「『里山条例』の目的は、里山を守ることだけでなく、先人の知恵を発見し受け継ぐことにあります。昨今、里山は、森林セラピー（森林療法）の場、あるいは絵画や音楽など芸術に親しむ人の活動の場などにも利用され、「森・里・街」をつなぐ場所として、新しい里山とのつき合い方が始まっています。『里山条例』の協定を結んだボランティアは48団体に上ります」と、将来の里山活動に大きな期待を寄せ、熱く語っていただきました。



椎茸原木づくりに参加した大槻幸一郎千葉県副知事。



コナラの伐倒作業。



伐倒したコナラの原木にドリルで種駒用の穴を開ける。



椎茸種駒「にく丸」の植え付け。



仮伏せ場へ原木を運ぶ子どもたち。

## 「成田里山づくりの会」の現場へ

京成成田駅から車で15分。蛇行が続く道路を進むうち、いかにも里山の風景らしい杉林や雑木林のある丘陵地帯が広がり、田畑が連なる。その杉林を抜け台地が上がったところに「成田里山づくりの会」の現場がありました。この一帯は、江戸時代には野馬が群れ棲んだ地域で、またサンプスギの植林地としても名高いところだ。

今回で12回目を迎えたこの日の参加者は、子どもさんを交えた家族組が目立ち、この会代表の富士ゼロックス(株)CSR部の野村さん、千葉ゼロックス(株)の大野さんら、関係者も含め50名ほどに上る大勢の活動の場となりました。「ちば里山センター」からは堀田事務局長も応援に駆けつけ、この日の活動メニューである椎茸原木生産と種駒植え付けの体験実習が行われました。



活動実施地は、千葉県成田市畑ヶ田の里山。

「成田里山づくりの会」はとにかくメニューが豊富。雑木林の手入れから始まり、植林・下草刈り・間伐体験、タケノコと竹林整備、サツマイモや落花生の植え付け、田植えの実習など、里山とそこに生活する人のすべてを体験することができます。

また、「成田里山づくりの会」が発信する社内ホームページ「里山通信」も楽しい。里山の生活や季節の移り変わり、現地作業の活動などが刻々と報告され、「ノコギリを使った木の伐採に興奮」「サツマイモと落花生を植えた」など、現場の様子が手に取るように分かる観察記録がいきいきとして興味深い。

## 椎茸原木づくり体験実習

椎茸原木づくりは、専門家による指導があり、まさにフルコースの、参加者にとっては貴重な体験実習となりました。

- ①コナラの伐倒：樹高12m、幹周り約70cmのコナラを伐採。
- ②地曳き作業：チルホール(簡易牽引装置)で、伐倒木を地曳きする。
- ③玉切り：コナラを長さ90cmに切断。
- ④穴開け：椎茸原木に、電動ドリルで種駒植菌用の穴を開ける。
- ⑤種駒植え付け：種駒は、美味しいと好評の「にく丸(290号)」を植え付ける。
- ⑥伏せ込み：スギ林内に伏せ込む。翌春には、立派な椎茸がたくさん発生するでしょう。

コナラの伐採作業は危険で専門技術が必要なため、千葉県林業サービスセンターの職員の方が、チェーンソーの使い方や作業手順などの労働安全対策を説明しながら、伐採作業が行われました。日頃見られない作業に、参加者は興味津々!

## これが「次の世代を担う子どもたちへの教育活動」だ

何よりも感心したのは、椎茸種駒の植え付け作業が、ほとんど子どもたちだけでできたこと。

さらに、種駒を植え付けた原木を、子どもにとってはかなり重いにもかかわらず、大人が指示する前に、2〜3人がペアとなって仮伏せ場まで運んでくれたことです。子どもたちの笑顔に現れた、自分の手で仕上げたという「達成感」が、ことのほかほほえましい。こうした光景を見ると、次の世代に理解をしてもらう環境教育として、これほど明快なかたちの現場はない、といえます。

参加した子どもたちに話を聞くと、今回で5〜6回目だとか。作業の段取りも分かっているようで、もうすっかり「里山の子」です。富士ゼロックスの環境行動の目的にある「次の世代を担う子どもたちへの教育活動」に最適な場だとの印象を強く持ちました。また、地主の石井さんと参加者の皆さん方とは、すっかり意思が通い合っているようで、活動作業を終えた皆さんの満足そうな顔から、まさに「森・里・街をつなぐ里山づくり」にふさわしいプロジェクトとなっていることを実感した一日でした。

そして、とにかく印象的だったのが、石井さんが丹精込めてつくったシイタケの炭火焼きのすばらしさ。その大きさといい、味といい、普段、街のスーパーで見かけるものとは形も香りも全く違います。地産地消の意味を噛みしめながら、産地と消費者流通のあり方を改めて考えさせられつつ、楽しく味わわせていただきました。



1年後にはこんな立派な椎茸ができるはず!



公益信託 日本経団連自然保護基金

*Keidanren Nature Conservation Fund*

日本経団連自然保護協議会

**KNCF** *Nippon Keidanren Committee on Nature Conservation*

日本経団連自然保護協議会

会 長：大久保尚武

事務局：〒100-8188 東京都千代田区大手町1-9-4 経団連会館6階

TEL.03(5204)1697 FAX.03(5255)6367

URL <http://www.keidanren.or.jp/kncf/>

